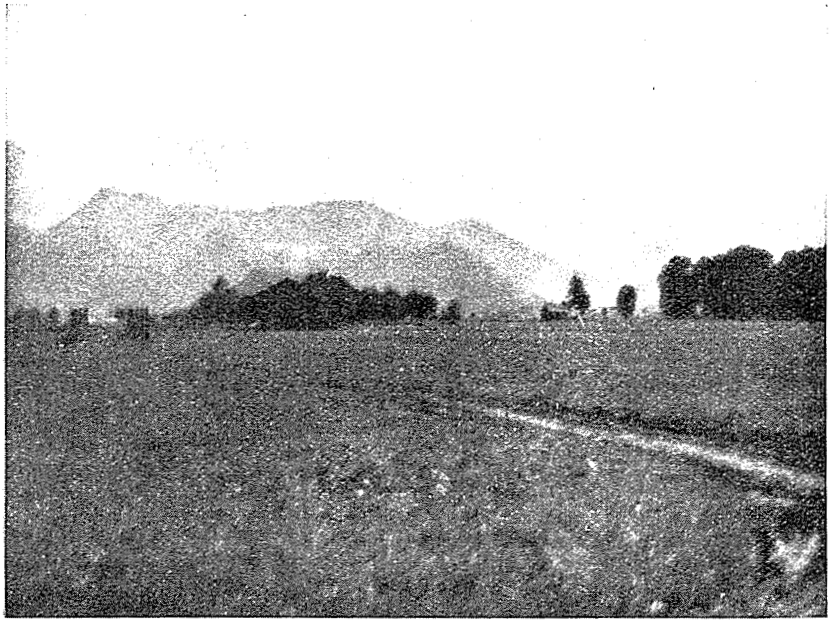
The Kansai University Bulletin

關西大學學報

昭和六年　第九十二號　九月十五日發行



高原の秋（ザルツブルグ）

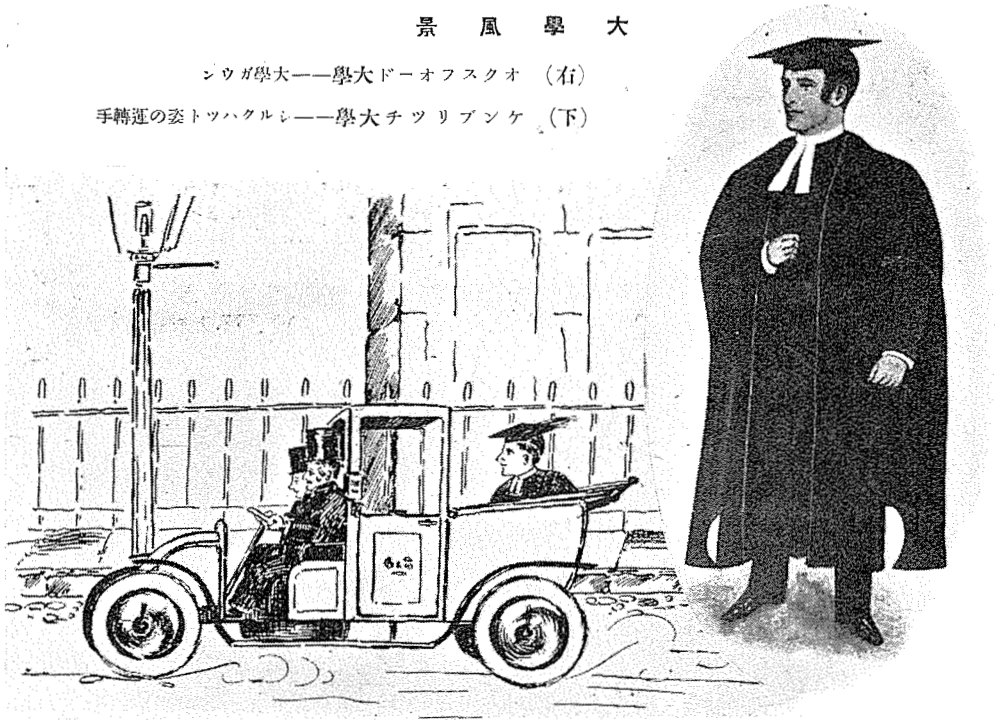
關西大學學報局

歐米の大學（其の八）

大學風景

（右）オクスフオード大學——ンウガ學大

（下）ケンブリツチ大學——シルクハツトの姿の運轉手

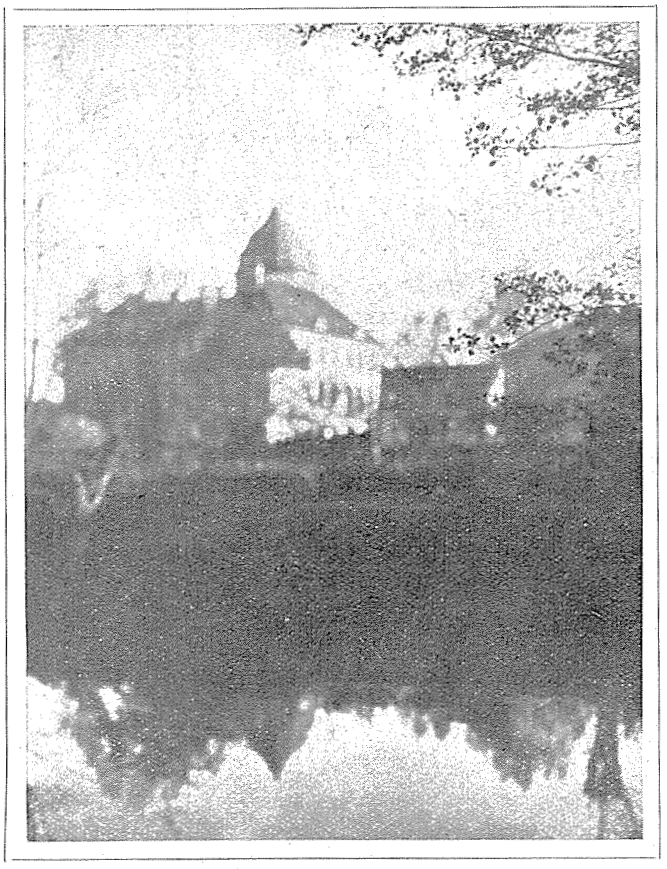


ベルリン大學

關西大學學報　第九十二號

目次

表紙――高原の秋（小關光尙氏藏）
挿繪――歐米の大學――（中村良之助氏藏）
古城風景（小關光尙氏藏）
意識流と反省作用……（四）
助教授　片山正直
英米社債と Sinking Fund の大系に就て…（一八）
講師　板橋菊松
ワアヅワスの「ルウシイの詩」について……（二三）
遠藤悠
學內報……（三〇）
第二學期始業――第九回夏期語學講習會修了式――
大禮記念館地鎭祭――教練教官の移動――宇佐美舊
講師の學內講演――學內消息――訃報
校友彙報……（三一）
學生彙報……（三三）
正井教授氏著「貨幣と爲替」を讀む……（四四）
講師　森川太郎
圖書館彙報……（五〇）



古城風景（其の一）
――ダブスペトの古城――

意識流と反省作用

助教授　片山正直

一

意識と言ひ現象と言ふも、その間には種々なる意味の意識があり現象があつて、區別して考ふべきであると思ふ。意識が心理學的意識に盡き現象が自然現象に畢るならば、現象學的問題提示は最初から不可能である。意識が深淺の差を有し、現象が明證の度を異にし、從つて意識や現象がその純粋なるものにまで還して見られるとき、我々の現象學的反省は可能となる。既に繰返し明にせる如く、現象學的領域はそれ自身に絶對なる純粋意識であり、純粋現象の世界である。自然的經驗的意識は純粋意識が自己を身體的に限定し、超越的知覺意識となれるものに他ならぬ、自己の先驗的母胎を忘れ、ひたすらに外部的超越的知覺の抽象的眞理性に生きるところに自然的立場がある。そこでは自我と非我とは超越的に相對立するが故に、對象は十全に知覺されず、意識は明證を缺ぎ、單に非我の描く陰影を見るに止まる。對象の偶然的な表象的屬性を見ることは出來るが、必然的な本質的存在性を認識することは出來ぬ。

しかし事象の必然的な本質的存在性の認識、即ち存在の眞の存在、實體的本質性を認識するところに、我々の純なる意識作用がある。存在の偶然的表象を越へて、その根抵たる實體的本質性を視向するとき、始めて、意識は意識となるのである。意識は事象の現實在自體を視向するもの、存在の實體的な深さを求むるものでなければならぬ。事象をしてしか在らしむる底の本質的存在を視向するに至つて、意識は自然的立場のまどろみから覺めて本質存在の光に接し、まことの意識となるのである。それ故に本質直觀は意識の自己訓練によつて外から得られるものでも、又先天的に賦與された神秘的能力でもない。そこに存在が自己の本質的存在を開示する本質直觀は、同時に意識の具體的な在り方でなければならぬ。意識は何物かへの志向作用であるが優越なる意味の意識は本質的存在への志向作用、純粋存在を觀取する作用でなければならぬ。まことに「本質に向觀することの自由なる可能性なくしては、一つの個別的直觀も可能でない。」(1)經驗的個別的直觀は、それが自己の限定を超越して純粋一般者を直觀する自由を基づける限りに、生存權を主張し得るのである。本質直觀は高次の意識作用であり、純粋意識作用である。

最も純なるもの、最も具體的なるものは、自己によつて成立し、自己によつて自己を限定するものでなければならぬ。純なるもの具體的なるものはアプリオリであつて、他によつて生成するものでない。このとき色を見色を理解するものは、色の外にあるのでなく、色自身の內なる色の具體的體系である、音を理解し音の美しさに醉ふものは音自身の意味體系である。或は色の體系は純なる視覺作用の實體と見得るが故に、色を見るとは、純なる視覺作用が自己の實體を見ることに他ならず、音をきくとは、純なる聽覺作用が自己の實體をきくことに他ならぬ。色覺や聽覺の原因と考へられる眼とか耳とかいふ如き如きものは、これらと對

應的に考へられた身體的焦點、正しく言へば純粋視覺作用、純粋聽覺作用の自覺的限定點と見ることが出來やう。しかもかくの如き純粋意識流こそ、我々に最も直接に與へられたものである。所謂物體現象は純粋意識の直接體驗を抽象的個別的に統一した超越者に過ぎない。

それ故に純粋意識が何等の超越者をも含まないのは當然なる事態であるであらう。本質直觀の志向する事象の本質性も、純粋意識にあつては最早やその超越性を失ひ、それの客觀側面を構成する意味契機とならねばならぬ。或は本質が體系的に自己自身を流動發展せしめるとき、それは純粋意識となる。それはそれに於て、本質體系が自己自身を流動的に限定するところの場所、本質體驗流自體である。純粋意識に達せむがために形相的（本質的）還元を經ねばならなかつた理由はこゝにある。單なる體驗や意識がそれであるのではない。純粋意識は意識の意識、作用の作用でなければならぬ。現象學的還元は、かゝる具體的根源領域に還歸せむとする意識そのものゝ方法である。フツサールの現象學的還元の中には、忘れたるふるさとイデアの世界を想起し愛慕し行くプラトンの魂がある。

現象學的根本領域はフツサールの言ふ如く先驗的（超越論的）である從つてそれが經驗的實在的な心的現象でないことは既述の如くである。それを錯覺や幻覺と同一平面に置くことは甚だしき誤謬である。純眞なるものに對してそこに嚴肅なる客觀性を感ずるのは、それが先驗的自律的だからである、他から導出することの出來ない自律的な本質の發展だからである。悲しみや喜悅が純粋體驗であつて我々がそこに深い人間性を見るのは、それらが人格的純粋感情のアプリオリに基づくが故である悲しみや喜悅を本能としか考へ得ない人は、外界に投影された感情しか感ずることの出來ない人である。物化された人間性或は意識のみしか理解することの出來ない人である。純粋意識は純なるものゝ流れ行く世界そこに生れ消え失せて行くものは、凡そ深き實在性を有つたものである。否總じて「在り」と言はるゝほどのものは、その究極的構成根據をそこに有たねばならぬ。フツサノルは、一切の超越的なるものを排除して現象學的殘基として見出された純粋意識は何物をも失つてはゐない、却つて一切の超越的なるものはこゝに構成されてゐる。(2)と言ふが、一切の存在者の存在性を開示し意義を賦與する原領域は純粋意識である。それこそ眞に「在るもの」、すべての對象界が否定された場合にも、「我思ふ」、の主語即述語の自覺に於て端的に許容さるべき不疑の世界である。

自然的立場を排除し、イデア觀照を中止し、ひたすらに對象的方向への作用を中和して、純粋體驗界に還らむことを要求した現象學的還元は嘗て詳細に論じた如く魂の轉向の論理である。現象學的還元は單なる學的方法ではなく、存在の根源を閉示し眞に「在るもの」を味到せむがための、生の超越化的過程の論理である。それの可能性は生、從つて意識の超越性にあると言ふことも出來やう。還元は立場の單なる變更ではなく、立場の自由飜轉を通して立場其物がより具體的根源的なる立場を自覺することである。還元の背後には眞に働くもの、働きつゝ自己の働きを見るものがある。それが後に明となる純粋我、絶對自由我である。私は還元の究極的可能性は人格の絶對自由我の自覺にあると思ふ。なぜかならば純粋意識流の統一がこの純粋我にあるからである。

(1) Ideen. s. 12.

(2) 2 Ideen. s. 94.

二

今や我々は現象學的還元を果し、純粹現象の野に到達して、全く研究を自由に行ひ得るに至つた。我々の仕事は進んで意識の Urlogos を其自身をして語らしむるにある。しかしながら一見反省を超越してゐると考へられる先驗的意識を如何して把握し、その構造樣態を如何にして解明記述することが可能であるか。意識は純なるものゝ流動持續として無限に新なる面目を呈露して止まない流れであり、個々の體驗は體驗的に相互浸透融合し關聯して、全體的意識統一たることを失はない。純粹體驗に於ては一即全であり、部分即全體である。個々の志向的體驗は統一的全體意識に於て在るが、翻て自己自展の內に全體的關聯を創造しつゝ流動するのである。かゝる一即全、部分即全體的體驗流は如何にして反省記述され得るであらうか。

我々は先づフツサールが「方法的豫備考察」(Methodische Vorerwägungen) と呼ぶものから追考して行くことにしやう。

人は現象學的還元を以て現象學唯一の方法となし、既にその中に意識の本質解明の可能性は充分に示されてゐると考ふるやも知れないが、フツサールの精神はそうでない。彼に從へば現象學的還元は絕對的な現象學的領域を見出すまでの方法、即ち未だ現象學的でない存在範域からひたすら純粹體驗の現象學的領域にふみ入らむとする立場飜轉の方法に他ならぬ、それは純粹領域を解明記述せむがための直接的意義を有するものでなく、たゞ一切の超越者を入括し、一切の存在定立を中和して、內實在に迫進せむがための方法に止まる。從つて未だ消極的たるを免れぬとも考へられやう。だからフツサールは「理念」六三節から七五節に於て、特に純粹本質解明の方法に就て縷々と教示する勞を吝まないのである。成程還元は現象內容を、純粹體驗の流に意味として解溶し、最も純なる具體的なる立場を所與とするに至つたが、未だ體驗流の解明記述の積極的手續を明示するものでない。還元を通して開示せられた純粹體驗流に關して、なほそこに直觀的把握からの距離がある。人は進んでこの距離をも克服して、一切を純粹明觀の光の內にもたらさむがため、甚深なる注意を拂はねばならぬ。

第一に我々は「明なる所與の正確なる言表」をなさむがために「先驗的に純粹なる意識の類例的な所與に對して、直接な本質觀得を施し、かくて所與を概念的に特に術語的に確定せねばならぬ。」(1) 學問は思惟の結果が知識の形式に於て整頓確保せられ、明白な言表命題の體系をなすところに成立するものなるが故に、概念的或は術語的に正確明徹な記述言表は特に重要である。そこで人は一方術語の正確さ純眞さに配慮し他方その術語に意味充實を與へる本質を明示せねばならぬ。かくて必然的に次の手續が必要となる。

第二に我々は純粹體驗の徹底的本質直觀を果さむがため、所與に近迫して、所與を敞ふ Unklarheit を排除せねばならぬ。當體そのものに漸次近迫して、明晰判明の度を高めつゝ、そこに志向當體の本質並びに本質聯關が完全なる所與となる完全明白の階層に達せねばならぬ。想ふに意識流の十全なる觀照は一擧にして得らるゝものでない。我々の方法は漸次的な直觀化の方法であり、それによる Methode ner Klärung である。

現象するとは、まさしく事象が直觀の光の中に自己の全體を所與とし、自己の眞相をあらはならしめてあますところなき光景である。かくの如き Gegenbenheit, Anschanlichkeit, Klarheit の Stufe を、我々は要求するのである。まことに現象學は直覺に終始する。

第三に我々は完全なる明晰性に於て所與となれる純粹現象當體に、同じく完全に明朗な本質把捉を遂行し、解明記述を仕上げねばならぬ。これフツサールが Die Methode vollkommen klarer Wesenserfassung と呼ぶところのものである。フツサールの根强き執拗なる記述を讀む人は、本質直觀が造作なく語られてゐるにも拘らず、それの完成が容易でないことを知るであらう。我々は暗き不分明なる場面から漸次明るい明晰判明な場面に進出し、無限に直觀の照明の度を高めつゝ、終に完全なる本質把捉に達するの他はない。しかして「直接なる直覺的本質把捉は類例的個別者の單純な現前化の根據の上に遂行され得る」と記述されるやうに、作業の生命をなす要素は自由なる想像（freie Phantasie）或は假構（Fiktion）であつて、これによつて類型的な體驗の追體驗即ち現前化は行はれるのである。(2)かくて純粹體驗の流れに屬する現象內容は體驗性を失ふことなく、分析記述せられるであらう。

以上摘要せるところから知られるやうに、フツサールが體驗流解明の方法として縷說するところのものは、還元と相異し、純粹體驗の所與に近迫し、且つそれに即して遂行せられるべき內容的意義を有するものゝ如くである。即ちこれらの手續によつて先驗的純粹意識流は、文字通りの現象として直觀的な明るさを得、その明るさに基づいてそれの本質並びに本質聯關を洞察し分析し把握し、正確な言表を與へ得るに至る。かくてそれは積極的な方法であると理解されやう。還元によつて本質的立場は排除されてあるが故に、解明の方法は全く現象學的立場に働きかけるものである。それ故こゝでフツサールがしば〳〵 Wesenserfassung, Wesensintuition と言ふところのものは、形相的立場の本質向觀作用を意味せず、全く純粹意識の分析把握の作業を可能ならしむるものである。要するに體驗流解明の方法は現象學的勞作の直接な土臺を與へむとするものであらう。

しかしながら現象學的立場に於て更に加へらるべき體驗解明の方法は決して外から押しつけられるものであつてはならぬ。純粹意識に單なる本質直觀を加へることは却て現象學的立場から形相的立場に逆轉することであり、獨創的な還元の思想を無用にすることである。單に考へられた意識の本質論は本質學的立場の仕事である。しかし眞の意識は單に與へられたものではなく、まさに gebendes Bewusztsein でなければならぬ。想ふにかくの如き純粹意識と雖も直觀化によつてはじめて所與ともなるであらう。直觀化、從つて明晰判明度の上昇によつて意識は自己を見るに至るであらう。とはいへ直觀化は對象化、能與的なるものを單に所與と化すことであつてはならぬ。それは精々意識が自己の明暗陰影を拭ひ去つて、自己觀照に入るための自己淨化に過ぎない。現象學的立場は徹底的自省のそれでなければならぬ。直觀するものとせられるもの、反省するものとせられるものとが對立する限り、それは未だ現象學的立場でない。こゝでは作用が直ちに自己を見、自己を知るものとならねばならぬ。フツサール自身、單に Wesensschau 或は Wesensanschauung などと言はず、unmittelbar intuitive Wesenserfassung と記述してゐる如

く、體驗流當體に加へらるべき純粋直觀は最早志向を性格とするものでなく、徹底的自省作用、自省的本質把捉——反省せられるものが反省するものであるが如き優越なる意味の內在的知覺ではなければならぬ。こゝで直觀するとは自己を所與とすることである。直觀が體驗の自己觀照といふ意味を得て、兩者は相即不離となり、Meteode vollkommen klarer Wesenserfassung に達し得るのである。

かくて直觀化は最も根源的なる意味の反省作用とならねばならぬ。我々はフッサールが「方法的豫備考察」の下にで說くところのものは、結局現象學的還元を補足し、眞に積極的なる絕對的反省作用の考察に入る文字通り豫備に他ならぬと考へる。單なる直觀化、明晰判明化でなく、絕對的反省こそ、現象學的解明記述を可能ならしむるものである。構成的に流動發展する意識流を解明記述し得るのは、自己を照し自己をかへり見る自己が意識の根抵に存するからでなければならぬ。

(1) Ineen. s. 124.

(2) Ideen s. 129 132.

三

フッサールは反省を純粋體驗領域の根本特性なりと考へ、現象學的方法は全く反省の作用に終始すると述べてゐる。(1)しからば反省の可能の問題は、現象學自體の可能性に關することがらであるであらう。言ふまでもなく反省は一方に於て學問的體驗の在り方であり、他方に於て自身體驗の種類、一つの作用である。ところで體驗の一種類である反省は體驗流の全體構造を把持するといふ重任を果し得るであらうか。今や現象學は、それの可能性が同時に問はれるであらうところの、反省による意識流の把握可能性を問ひ、意識の一般的構造の洞察から意識流と反省作用の相互關係を明にせねばならぬ。しかもこの問ひと究明が單なる方法論上のことがらでなく、現象學本來のそれであることは縷說するまでもない。

自然的立場の反省の可能は疑ふ餘地がない。尤もそれが嚴密なる意味の反省なりや否やは問ふところでない。色の知覺、音の知覺、總じてフッサールの所謂經驗的直觀に於ける事象の應接にあつて、我々は注意作用の焦點附けから事象を對象とし、それに視向することが出來る。何よりも先に我々は對象を注視的に固定するであらう。それから對象が如何なる形態如何なる色彩を有つか、如何なる原因により何處より來つたかそれは我々に對して如何なる交涉關係に立つか、などと反省するであらう。即ち我々は事象を固定し、一層適切に言へば孤立化し、それの諸の存在樣態を見るのである。(この場合旣に本質直觀が背後に働きつゝあるにあらずやといふ疑問が生ずるかも知れぬが、こゝで追求する必要を見ない。)自然的立場では注意作用は直ちに反省的固定作用であり、やがて又對象の在り方の反省的限定作用である。この固定的限定的な反省作用が流動して一瞬もとどまらない感性的直觀の全體を把持し得ないのは言ふまでもない。反省が活動するのは注意の焦點內に限られてゐる。心理學者が有意注意と無意注意を區別し、意識の明暗を說き、過去の經驗へ聯想を云々するのは、かゝる反省の於てある心理的場面を示すに他ならぬ。

かやうな素朴な對象的固定的反省を如何に多く集積しても、そこから作用の反省は生じない。我々の問題とする反省は單に事象限定の作用で

なく、一般體驗を內から或は上から見る反省である、作用の反省である。兩者の間には根本的な相異がある。反省が作用の反省とならむがためには、對象に向けられたまなざしを轉向しつゝ自己自身を見ねばならぬ。我々が物を見てゐるときいはば唯物あるのみである。我々は心外の物を見てゐる、表象は心外の對象の表象であると意識せられたとき、始めて作用の反省の意味が明となる。意識が物を意識し反省することゝ、意識が意識自身を意識し反省することゝは、全く次元を異にせることがらであろ。

私は作用の反省の可能は、諸の作用が動的統一の形に於て一つの我に結合され、飜つてそれが我によつて遂行されてゐるところにあると思ふ作用の中に Ichaktualität を見、作用の Ichbezogenheit を知ることによつて、作用の意識、從つて作用の反省は成立する。「私が見つゝある」「私が分析しつゝある」と言ふやうに「私が體驗しつゝある」に於て、一切の cogito が自己から出で自己に於てあることを知るとき、作用の反省は成立つ。作用の反省はそれが流れ出ずる原點を知ること、その原點から再び作用方向を追視することによつて成立つ。しかもかく作用の原點を見、作用方向を追向するものが、作用を動的に統一するものである。かくて最初から作用の統一者として作用に內在したものが自己自身を自覺したとき、同時に作用の意識或は反省が意識されるに至る。我は反省の存在根據である。

反省は作用を我の作用とし、しかすることに於て我の作用を對象化することである。それ故に反省とは、體驗流にその所屬の明證を賦與することであると考へることも出來やう。しかし體驗流は反省せられるにせよ、しからざるにせよ、最初から我の體驗でなければならぬ。誰の體驗でもない體驗があるとは考へられない。作用は最初から ich-bezogen であり、全く我から分離した作用を考へることは出來ぬ。正しく言へば一切の意識現象は「私に意識せられる」mir bewuszt といふことから始まるのである。知覺の如きものゝ根抵にも mir bewuszt がなければならぬ如何なる知覺、如何なる體驗にも反省視向が轉ぜられるのは、一切の知覺又體驗が本來自我によつて動的に統一され、それから流れ出てゐるからでなければならぬ。普遍的なる意識現象の事實は「感じや考へが存する」ことではなくて、「私が感ずる」「私が考へる」といふことでなければならぬ。意識は人格的意識でなければならぬ。心理學の直接與件は單なる心理的事實でなく mir-bewuszt-sein であると思ふ。

人は時として今迄無意識であつたが漸く意識したなどと言ふが、全く無意識であつたところから意識が生ずるのではない。意識は徹頭徹尾意識である、意識せられない意識といふは矛盾である。意識は何物かの意識であり何等かの對象を指示すると共に、自己自からの意識を含み、意識の中に意識はそれ自からを直接に意識してゐるのである。こゝに意識の意識たる眞面目があり、作用反省の可能根據がある。反省は意識の內部知覺を押し進めて自己を內に超越し、自己を自己の意識の對象とすることである。この內超越によつて意識は、まさに何物かについての意識として存在し得ると共に、對象は意識の對象として存在し得ることが明白となる。まことに意識或は作用は、自己を此方に超越しつゝ自己を存在せしめ、同時に自己を反省し得るのである。意識の本質は自己內超越による自己創造である。「私は私である」の反省即直觀的なるものが意識

成立の根抵としてなければならぬ、かくの如き自覺の內面的連續が意識の具體的統一として存せねばならぬ。

(1) Ideen, s. 144.

四

かくて我々は固定的限定的反省作用の他に、正確に言へばその根柢に作用體驗をかへりみる反省作用の存在すること、否存在せねばならぬことを明にしたのであるが、これだけで意識と反省作用との關係問題が解決されたのではない。自己を內に超越して自己に視線を向けることによつて意識の反省は成り立つが、しかし反省が反省としての面目を果さむがためには、めざす意識流を把持しその Urlogos を開示せねばならぬであらう。我々の問題は意識の全體性を反省的直觀の中にあますところなく把捉し得るや否やにある。既述の如く反省は可能である。例へば端的に體驗せられた音樂を、特に想起から、反省の對象となし得ることは自明である。しかしかく反省の對象とせられたものは何であらうか。それは客觀化された音調及びその系列であるが如く見へる。端的に體驗しつゝある音樂の美的享受作用そのものが、あますところなく反省の對象になり得るとは言ひ得ぬのではなからうか。未反省の狀態から反省の狀態になつたとき、前者の一つもが失はれずに後者になつたか否かに關しては、むしろ否定を以て答へらるべきではなからうか。そこで我々は意識流と反省作用の相互關係を一層立入つて究明せねばならない。

フッサールは反省の一般的性格として「意識變樣」(Bewusztseinsmodifikation) に就て語る。(1)既に述べた如く反省は「私が」の Ichaktualität の意識から、從つて內超越を媒介とせる或種の態度變更から生ずる。直接なる未だ反省されない體驗或は意識は反省されることによつてある變更を受け、反省されたものとなるのである。逆に言へば凡ての體驗は本質的に反省的變樣に推移し得るのである、そして反省の對象たり得るのである。意識變樣は意識自からの展相であつて、ひたすらに外に向けられた視線を、自己自身に轉向するとき立場變更として知覺されるに至る。變樣は直接的であつたものが媒介的となることであり、ひたむき(直向)であつたものがかへりみる(反向)ことである。今私が無邪氣に音樂に聞入つてゐると假定しやう。この直接體驗或は純粹經驗の無邪氣さ又ひたむきは、反省的變樣によつて自から破られ、反省されたものといふ狀態に入るであらう。流れ行く無邪氣な原體驗は反省を媒介として自己を再現し、その本源的なる姿をそのまゝに保留せむとするのである。こゝに反省と體驗の相互關聯がある。

意識流は既にその名稱が語つてゐるやうに時間的な流動である。これに反して反省は流れ行く體驗をその本源的所具性のまゝに保持せむとする。反省は何よりも先づ追考的再現的努力であり、その限り時間を超克せむとする動向を有つてゐる。人あつて次の如く論ずるかもしれない。反省せられた流動は既に流れ了つた流動であり、反省せられた體驗は固定せられた體驗であつて、いづれにしても流動そのもの體驗そのものとは異ると。しかしながらもし流動や體驗がその潑剌たる姿のまゝに固定され追體驗されるならば、反省の目的は達せられたと言はねばならぬ。流動自體は決して學の標的でない。意識流が反省を媒介として自己の Urlogos を開示し得るならば、一層立入つて、意識流が自己の Urlogos

を語ることが反省であるならば、反省は意識流の把持といふ現象學的勞作を遂行し得るであらう。

我々の體驗はたしかに時間に於ける流動である。それは一瞬にして過去といふ暗黑の中に消え失せて行く。しかし體驗は、それが優越なる意味の體驗である限り、次から次へと過ぎ去るまゝに永遠の忘却の世界に封入せられるものでなく、自己の本源的な姿を保持せむとするのである我々は視向を後展しつゝ體驗を追視することが出來る。我々は過ぎ去りし體驗もかくありしものとして把持することが出來る。こゝにフッサールの Retention（後觀或は後展）と呼ぶところのものがある。彼は「內部時間意識の現象學」に於て時に Retention を鋭き、反省がそれに基づくこと、いはば Retention の充實が反省であることを示してゐる。勿論 Retention の關係は連續するものであつて、Retention は更に Retention の對象となつてきはまるところがない。同時に彼は Retention と同樣な關係に於て Protention（前觀或は前展）を考へる。我々は期待や企圖や行動に於て視向を前展して、やがて生起せむとする、その限り未來的なる事態を反省することが出來る。一歩進めて言へば、未來的事態を反省し、それへの具體的生活を決定すること、即ち Protention の反省を媒介して刻々の行爲を決意することが、我々の最も現實的な在り方である。日常生活に切實なる實踐的反省は Retention ではなくて、却て Protention である。而して Protention は更に Protention を生み、かく Protention の生產的關係に於て現在は未來へと體驗的に進展するのである。特に實踐的なる體驗は前觀的反省を契機とせずしては生じないであらう。なぜかならば實踐とは未來を媒介して現在を決定するとだからである。

かくの如く我々の視向作用は過去未來の前後領域に後展前展するのであるが、兩域の接點として「體驗の生ける今」(das lebendige Jetzt des Erlebnis) もしくは「生ける今の瞬間」(des Moment des lebendigen Jetzt) を考へることが出來る。Retention と Protention との絕間なき流もこの生ける今を起點としてゐるのである。體驗今 (Erlebnisjetzt) は必然的に Horizont des Vorhin 並びに Horizont des Nachher を有つが故に、この Horizont に於て我は自由に前展し後展して、體驗を在らしめつゝ、深く自己自身を直觀するのである。「今」は點的なるもの、新なる內容に對する同一形式、と解さるやも知れないが、それは後に明らかとなる如く體驗の重心として深く先驗的自我に通ずるものであり、體驗を體驗として開示する眞の超越的場面である。過去も未來もこの「今」に於て統一され「今」から見ることが出來る。「今」は全體驗の綜合點、同時に全體驗の創造點である。我々は時の流れに從つて現在を離れて行くのではない、唯現在を奧深く進み行くのである。「生ける今」はまさに「永遠の今」といふことも出來る。體驗の直觀的方向と反省的方向は「生ける今」に於て統一されてゐる。それ故に我々はこの體驗「今」を純粹意識流に於て分析し、純粹先驗的自我との關係を明にするならば、意識流と反省作用の根本關係の問題は解決されるであらう。

(1) Ideen. s. 148.

五

現象學的還元によつて純粹意識の領域が開示された。意識は純粹なるものゝ體驗流でなければならぬ。ところでこゝにもまたそれが意識であ

る限り、意識するものと意識されるものとが何等かの意味に於て區別され得るであらう。見らるゝものと見るものが相即不離であり、一あつて二なき樣態は、作用方向、對象方向が全く存しないといふ意味ではない見られるものが見るものゝ內容であり、結局自己に於て自己自身を見ることが、純粹意識の在り方ではあるが、それにも拘らず我々は意味的に對象方向と作用側面とを區別して考へることが可能である、可能であるばかりでなくUrlogosの解明を目的とする限り必然的である。單一なるものが必ず純粹であるのではない。體驗として純一無雜であつてもロゴスとしては「私が私に於て私を見る」と言表することが正しき自己開示である。こゝに所謂意識のノエジス・ノエマ的構造がある。意識はノエジス・ノエマ的構造に於て在るが故に意識なのである。ノエジス・ノエマは意識のUrlogosでなければならぬ。

意識のノエジス・ノエマ的構造を立入つて究明することは今の我々の問題でない。むしろ我々はノエジス・ノエマ的構造を有つ意識を根柢に於て統一する純粹自我の規定から、意識の反省は如何にして可能であるかの問題を解決せねばならぬ。

既に述べた如く、意識はmir-bewuszt-seinであり、このIchbezogenheitの自覺に反省は成立する。意識を動的に統一するものが意識をかへりみるものであつた。しからば純粹意識に於ても相關者として純粹自我を考へることが出來る、無限なる意識流を統一して自己同一に止まるものが許容されねばならぬ。純粹意識を純粹に意識するものがなければならぬ。そうでないならば、それに最早や意識と言ふことは出來ない。純粹であるにせよ不純粹であるにせよ、それが意識と呼ばれるからには、それを意識するものがなければならぬ。意識性質は漸次推移して新なる局面を呈するであらうが、かゝる意識の主語となるもの、無限のノエジスを統一するものは常に同一である。本體なき本體とも言ふべきものが意識流を述語としてゐると考へることが出來る。これフツサールが純粹自我(reines Ich)と呼ぶところのものである。身體的心理的自我は還元されるが、純粹自我は現象學的殘基として止まる處のものである。(1)

純粹自我は、それだけとして見れば、全く空なるもの(völlig leer)記述し難きもの(unbeschreiblich)たゞ純粹自我といふの他なきものである。(reines Ich und nicets weiter)(2) それは直接に純粹意識と一つになつて所與となる。(das reine Ich unmittelbar in eins mit dem reduzierten Bewusztsein gegeben ist)(3) 考へられた自我は死せる自我、自我の單なる形式に過ぎない。體驗の純粹自我(das reine Ich des Erlebens)或は純粹な體驗する自我(das reine erlebende Ich)は體驗を外にして別に在るべき場所はない。自我といふも既に對象化されたものであり、見られた影に過ぎないと考へることも出來やう。しかし作用の根柢には、あらゆる作用を成立せしむる形なき基體がなければならぬ。直觀するものではあるが直觀されはしない自己がなければならぬ。我々は單なる自然的我によつて生くるのではなく、この形なき純粹自我を基底としてそれに於て生くるのである。すべての體驗は純粹自我の體系である。(4)

豐なる內容と自己の內容として有たむとするものは、それ自身無內容でなければならぬ。限定された內容を有つものは無限なるものゝ主體となることは出來ぬ。自身無內容な同時に無限定なるものが意識流の主體

となる、かくて外を自己の内として見ることが出來るのである。我々はフツサールと共に次の如く記述することが出來やう。「自我は體驗の上に自己の純粹なまなざしを向け、それを現に在るもの特に現象學的時間の中に經過するものとして把捉する」(5) それ故に純粹自我は眞に働くもの、純なる作用の作用として唯一の本體とも言ふべきものである。眞に働くもの形なき本體は、たゞ働くことによつて自己の影を見、自己を理解するの外はない。

意識を統一する純粹自我は、眞に內在して働くと共に、作用を根柢に超越するものでなければならぬ。フツサールが純粹自我の在り方を「內在に於ける一つの超越」(eine Transzendenz in der Immanenz) (6) と記述するは、適切なる表現であるであらう。それは內在に於て超越するが故に內在界を統一し、內在界の內在性を見ることが出來るのである純粹意識界が內在界であると記述され得る唯一の根據はこゝにある。純粹意識界を內在界とするものは、自我の eine eigenartige Transzendenz でなければならぬ。意識は自然的立場の事象に對して內在的であると言ふよりも、むしろ自我の超越に對して內在するのである。なぜかならばフツサールが最近の論作「形式的並びに先驗的論理學」に於て、より明白に論斷してゐる如く、自我は一切の世界的なるものに先行し、心理的且つ物理的なるもの一切を含めての世界を konstituieren する、das konstituierende Ich 或は das transzendentale Ego だからである。(7) 生ける現在今はかくの如き自我が意識を創造して行くところに成立つ。私は眞の自己は時の中にあるものと考へない。現象學的時間は形なきものが自己の形を創造し、純粹形相が純粹質料に於て自己を構成して行く形式であると思ふ。時間の中に自己は自己を知るが、眞の自己は時間を超越する。果なき過去と未來とは、現在に於て時間の中に躍入し同時にこれを超越する自己の投げた影とも考へることが出來る。フツサールはすべて個々の體驗は始まり經過し消え失せて行くが、體驗流自體は始まりもしなければ了りもしない、それは無限なる統一 (eine unendliche Einheit)純粹我の一切の體驗を必然的に包括する形式(eine all Erlebnisse eines reinen Ich notwendig umspanuende Form) などと記述し、(8) 內部時間意識の現象學」では der zeit-konstituierende Flusz とか das zeit-konstituierende Kontinuum とか呼ぶものを究竟者と考へてゐるが、(9) 眞に時を超越して時を創造するものは Erlebnisstrom とか Flusz とか呼ばれる如きものではなく、無限なる體驗流、時間構成的連續を內に見これを自己の自由なる場所となすものであると思ふ。時を自己の述語となし、これに於て自己を開示つゝ自己に還歸して首尾相合するものが、我々の考へ得べき最究竟者である。フツサール自身明言してゐる如く還元によつて達せられたものは、未だ最後のもの (das Letzte) 最後の眞に絕對なるもの (ein letztes und wahrhaft Absolute)ではない。(10) 純粹意識の底には本體なき超越論的自我ともいふべきものが存在する。

かくて意識流を見るものは純粹自我である。こゝでは見ることが働くことであり又反省することである。まことにカントが言つた如く、我(純粹自我)想ふといふことがあらゆる體驗流を浸透して居なければならぬ。フツサールの言葉を以て言へば、純粹自我から放射された「まなざし」(eine von dem reinen Ich ausstrahlender "Blick") が、一切の現實の意識を支配してゐなければならない。カントに於ても我の先驗的統覺

が認識對象界の構成根據であつたやうに、フツサールに於ても超越論的自我が一切の世界を構成するといふ意味を有つてゐる。いはゞ我の視向作用によつて、あらゆる意識流は機能を得てまことの意識なり、意義賦與による對象構成が可能となるのである。凡ての體驗に於て意識變樣が可能であり、從つて體驗が反省の可能を本質的に有つてゐるといふことの究極的根據は、純粹自我が體驗を內から見てゐるところにあると思ふ知るもの、感ずるもの、働くものゝ背後には、これらを見るものがあるこれらを照すものがある。現象とは自己自身の姿を光の中に示現し、しかすることによつて自己を見ることでありとすれば、意識現象もそれが純粹現象であるからには、それが自己自身を照明する光の中に自己を示現するといふ趣がなければならぬ。即ち徹したる意識の底には昭々として來り現ずるものがなければならぬ。驚くべき美しき寂光土、光明ふりそゝぐ永遠の世界は、彼方にある形而上學的實在ではなく、まゝさに人格の底に現ずる星夜の如き玲瓏たる全的體驗である。こゝから意識流を見ることが眞の絕對的反省である。我は意識流を超越するが故に、その限り無我なるが故に、意識の反省が可能となるのである。本質直觀も亦かゝる形なき意識の基體によつて可能となるのである。「反省は反省的本質直覺（die reflektive Wesensintuition）である。」（11）

（1） Ideen. s. 109.
（2） Ideen. s. 160.
（3） Ideen. s. 110.
（4） Ideen. s. 159—160.
（5） Ideen. s. 163.
（6） Ideen. s. 110.
（7） Formale und Transzendentale Logik. s. 211.
（8） Ideen. s. 161—163.
（9） Zeitbewusztsein. s. 429. s. 451.
（10） Ideen. s. 163.
（11） Ideen. s. 153.

六

意識は時間に於て流流變化し、しばらくも同一の景觀を保ちつゞけることがないと考へられる。まことに意識に激しては奔流となり、淀んでは淵となる流である。とはいへ、流動の過程はいたづらな無秩序でなく動くべくして動き靜かなるべくして靜まり、自からに統一的全體の面目を開示する。我々が意識の末梢に囚はれることなく、身體的限定に偏することなく、意識をしてその本來の面目に於てあらしめ、全く einstellungfrei な明鏡止水の境を現ぜしむるならば、これ純粹意識である。純粹意識は自我の最と具體的な在り方、自我が自己を失つて眞に自己に生きる光風霽月の境地である。身體的限定を逸せしめて顯現するこの純粹現象界は、最早一切の立場的限定から自由であり、却て諸の立場を構成する原領域として文字通り absolutes Sein である。一切の作用はこゝから流れ出で、こゝに流れ來る。

意識が純粹意識として在ることが意識の本體である如く、自我が意識を純粹に意識するものとして在るとき、それは自己の實體性に於て在るのである。誰の意識でもない意識が存在しないやうに、自己を全く意識

しない自己があるとは考へられない。だからcogito, ergo sum といふやうに、單に我が存在するから意識するのではなく、意識するから、まさに純粋に意識するが故に、純粋自我は存在するのである。背理のやうであるが、眞に意識の内に在るが故に、意識を超越して在るのである。眞に時の流にあつて働くものが、時を超越して自己の働きを見るものである。意識は現象學的時間に於ける流動であるが、流動が流動であるのは流動そのものゝ内に明鏡止水の止觀の境が存するからである。既に引用した如くフツサールは「自我は體驗の上にその純粋なまなざしを向け、それを現に在るものとして特に現象學的時間の中に流れ行くものとして把捉する」(1)と記述してゐるが、もしそうであるならば一層徹底して自我は形なくして形をうつし、無にして他を遍照するが如きものでなければならぬ。彼の言ふ「體驗の生ける今」(das lebendige Jetzt des Erlebnisses)(2)「連續的に流動する絶對本源位相」(eine kontinuierlich fließende absolut originäre Phase)(3)「純粋自我の本源性圏域」(der Originaritätshorizont des reinen Ich)(4)などは、彼が考へてゐるよりも一層深きものでなければならぬ。我々は時を超越する存在者、眞の時の支持者を認めざるを得ないのである。ハイデグガーは根源的本來的時間性を未來と見、(5)時間性は gewesende-gegenwärtigende Zukunft として時現する、(6)と考へてゐるが、しかし單に考へられた未來は眞に時現する時間性ではない。時現する未來は現在の底にあるもの、刻々の現在の達し難き深みをなしつゝ、今を前展し行くものでなければならぬ。再び背理のやうであるが、時を越へその意味に於てのみ Zukunft であるものが、自己を zeitigen するものである。ありし現にある未來といふ如きものは、たゞ時を底に超越する立場から始めて直觀し得るものである。眞の未來は永遠に達すべからざる時の無底の底ともいふべきものでなければならぬ。なぜかならば達せられたるものは常に過去であり考へられた未來もやがて過去となるべき運命を有つ。死への存在は過去への存在である。ハイデグガーの如く單に未來を本源的と考へるとき、却て過去に墮落する。時現して盡くることなき現在の底が眞の未來である。過去も現在もかやうな底なき未來の symbol とならねばならぬ。かくて始めて gewesende Zukunft 或は gegenwärtigende Zukunft といふ如きものを考へることが出來るのである。眞の時は却て時を超越するものゝ時でなければならぬ。私はこの時を超越して時を支持するものが、我々の眞の自己であると思ふ。まことに「心性本來無念」でなければならぬ。死への存在、從つて關心が我々の最も深き生であるのではない。無量壽にして無量光の生命が却て魂の本土である。死は身體的限定からの開放といふ意味を有つに過ぎない。ハイデツガーの人間學は一種の人間學であるに過ぎぬ。人間は彼の言ふやうな有限なる存在ではなく、Universum(シユライエルマツヘル)或は Totalgegebenheit(シエラー)に於てあり、それへの還歸に意味と價値とを自覺するところの、その限りに無限なるものを構造契機とする存在でなければならぬ。

單なる意識作用として反省が考へられる間は、全體的意識流を反省するものとはならない。意識流を完全に自己の手に歸する反省は、諸領域を自由に生産する形なき我の自己直觀である。反省と體驗が別々に考へられる限り、如何に反省を押し進めても體驗流を明晰判明に把握することは出來ぬ。體驗流を内から把握し、その全體構造を開示し得るものは

これを自ら構成する立場からの絶對的反省でなければならぬ。絶對的反省は絶對的自己直觀である。こゝで反省と直觀とは同一でなければならぬ。それ故にフツサールの言ふ如く反省は反省的本質直覺である。絶對的反省は超意識的なるものが一切の意識を遍照するところに成立つ。意識を越へて意識を限定し意識を見ることが同時にこれを反省することである。「この種の反省によつてのみ意識並びに意識內容は認識される。」(7) 意識には形なき本體があり、意識を遍照するものがある。純粹意識は遍く照された意識である。意識は自己自身を照明し、照明することが實は意識することである。意識は光であり、その本質に於て反省的である。だから「能與的意識とその主體への反省は可能である。」(8)「反省作用によつて原理的に知覺せられることが、體驗の在り方である。」(9)

かくて我々はフツサールと共に反省の特質を次の如くに記述することが出來やう。「反省とは上の論述から知らるゝ如く、それに於て體驗流がその多樣な顯現と共に明確に把捉され分析され得る作用に對する名稱である。反省とは——次の如く言表することも出來る——意識領域一般の認識に關する意識方法の名稱である。」(10)「それと共に反省は完全なる認識の理想と何等二律背反的紛爭を釀すものでないことが同時に語られてゐる。」(11) 即ち「反省は對象的關係を變更せず、從つて未だ反省されない體驗が反省へ推移するとき、その本質を失はないのである。」(12) かくて純粹自我の自己直觀としての絶對的反省が完全なる認識の理想でなければならない。反省と體驗或は直觀とは本質的に分離せられない。それ故にフツサールがしばしば未反省の體驗と反省された體驗とを區別して、反省はいはゞ體驗に參加してこれを十全的に把捉する、といふやうに說くのは未だ不徹底である。反省によつてのみ體驗は知覺される、それが體驗の存在の仕方であるといふならば、體驗と反省とは相即不二でなければならぬ。もとより體驗はいきなり反省そのものではない。しかし反省を離れて體驗は自己を現象し開示する場面を有たぬであらう。視覺作用を離れて色の現象は存しないやうに、絶對的反省のまなざしを外にして純粹意識は存しないであらう。色が色であるとき既に光の中にあるやうに、純粹意識が意識として知覺されるとき既に絶對反省の遍照に於てなければならぬ。意識の根底には見るものがなければならぬ、意識の中には常に無底の底から來るまなざし或は光がなければならぬ、眞に存在するものは自己自身を見るものである。かくてのみ次の言葉は深き妥當根據を獲得する。「直接に見ること、本源的に與ふる意識としての見ること一般は、凡ての理性的主張の最後の權利淵源である。」(13)「凡て本源的に能與的なる直觀は認識の權利淵源である。」(14) フイヒテも後期の知識學に於て「存在と光とは一つである」(Sein und Licht Eins)「光は全然自我であり、自我のみが光である、」(15) などと言つてゐるが私はフツサールの現象學の根據には、特にその直觀主義の基礎には、かくの如きものがなければならぬと思ふ。さなくばワルタ・エアリヒの主張する如く、絶對的反省は不可能となり、同時に現象學はその成立の地盤を失ふであらう。(16)

さて「理念」を注意深く讀む人は、フツサールが純粹自我の個別性從つてそれの多を說いてゐることに氣附くであらう。「一つの純粹自我の體驗」「一つの純粹自我と一つの體驗流とは相關的である」「一つの純粹自我」「二つの

體驗流（二つの純粹自我に對する意識領域）」といふやうな記述は、一つの體驗流に對して一つの我、即ち體驗流の多に對して純粹自我の多を立てゝゐることが明白である。このことは「形式的並びに先驗的論理學」に於ては一層明瞭であつて、transzendental anderes Ego 或は Vielheit koexistierender absoluter Subjekte を說き興味深き問題を提出してゐる。今私はこの興味ある問題を追求することは出來ないが、純粹自我の個別性は決して身體的限定によつて成立するものでなく、意識の內部知覺的志向統一によつて必然的に成立つものであるといふ彼の考は正當であると思ふ。旣に述べた如く意識は mir-bewuszt-sein である、意識の志向性は我の視向作用である、ノエジスの終局は純粹自我に基づく。誰の自我でもない普遍的自我は體驗流の生きた統一を構成することは出來ない。純粹自我の視向的構成が奧底となつて、意識はまさに私の意識として純粹に現象する。かゝる自我を豫想することなくしては、生命ある本源的能與的意識（originär gebendes Bewusztsein）を說くことは出來ぬ。眞に生けるものは志向的體驗であるが、そのノエジスの奧底には、まさにその自由なる作用の故に、純我がなければならぬ。かくて意識は時に於ける變化でなく、個性的創造的な流動となる、時は却て先驗的自己の創造的形式となる。意識はかくて個體的である。

しかし個體的なるものはその根底に於て全體的なるものを豫想しなければならぬ。無限に新なる面目を呈露して止まぬ意識の究極的源泉として、超意識的全體がなければならぬ。フツサールの純我をシエラーの人格とすれば、Person der Personen ともいふべきものが考へられるであらう。我や人格が最後のものではない。それらは更に全體的奧底を有たねばならぬ。それが何であるかは究極的世界觀の問題として、夫々の立場から人格的信念の對象として解決されるの他はないが、自我の認識作用の根底には超越論的實在ともいふべきものが、行爲の根底にはバルトなどの所謂 Urgeschichte ともいふべきものが存在し、（18）我々の意識活動はかゝる超意識者と相接するところに生れ行くものでなければならぬ。それは超意識者なるが故に知の對象ではなく、寧ろ信の對象である。我々の先驗的自我は、かゝる實在に連なり、かゝる實在の面目を宿す。我々の自我はそれだけとして個性的全體であると共に、絕えずその根底の絕對的全體を求めて、そこに意識の無限なる創造的活動をつゞけて止まない。かくて我々は意識の深い意義を自覺することが出來る。それは個體的であると同時に全體的でなければならぬ。虛心に澄徹したとき我々は個體即全體に於て生くると言はねばならぬ。このとき現象學的絕對的反省も亦成立つ。自己をどこまでも個體的に考へ、個體の外に出ることが出來ぬとなすは、未だ體驗の無心無我の境を知らざる者の說である。

（1）Ideen. s. 163.（2）Ideen. s. 149.（3）Ideen. s. 150.（4）Ideen. s. 165.（5）Sein und Zeit. s. 369.（6）ebenda. s. 350.（7）Ideen. s. 157.（8）Ideen. s. 156.（9）Ideen. s. 84.（10）Ideen. s. 147.（11）Ideen. s. 157.（12）Ideen. s. 155.（13）Ideen. s. 36.（14）Ideen. s. 43.（15）Die Wissenschaftslehre von 1804. s. 159. s. 193.（16）Vgl. Kand und Fusserl.（17）Formale und Transzendentale Logik.（18）Karl Barth, Dogmatik. s. 230.

（一九三一・五）

英米社債とSinking Fundの大系に就て

講師　板橋菊松

（一）序言

社債も公債と同じく其の資金を廣く公衆から募集し、公衆も亦是に依つて安全且つ確實に利殖を圖らんことを希望して居るのであるから、社債の發行者たるもの常に此點に深甚の注意を拂ひ當該社債の元利金支拂に對しては公衆をして假にも不安の無からしむる樣期すべきである。元來公債は國家若くは公法人發行に係り大體に於て故障なきものと看ることが出來るけれど、社債殊に我國の社債は是に反し商事會社が當面の營利資金の不足を補ふの必要に迫られて募集されるものが多いから、往々其の計畫放漫に流れ元利金の支拂に窮して公衆に迷惑を掛けるばかりでなく、社債投資に暗影を投じて果ては一般財界をも攪亂するに至る虞れなしとせない。彼の英法の理論としては社債の償還を受ける權利は最初それが表示されて居ると否とに拘らず又 legal にも equitable にも會社の財產と形影相伴ふ關係に在ると看做されて居る程それ程重要なる權利である。故に此の權利一つが侵されたならば社債權者として如何なる特典が與へられても結果に於て總てを失つたも同樣であるから、之を擁護すると云ふ事は詰り社債權者を擁護する譯である。最近東京財界の有力者の會合である五日會の例會に於て「社債は原則として擔保附にし減債基金を設くること」が滿場異議なく可決されたのも全く社債の元利金支拂を確保する事が今日の急務であると認められたからである。私は今其の社債の減債基金の大系だけを茲に簡單に述べて見よう。

（二）減債基金の起源

抑々減債基金（Sinking fund）なるものは公債の元利金支拂を確保する爲めの制度であつて、今を距る二百十五年即ち一七一六年に英國のロバート・ワルポール（Robert Walpaie）が始めて同國の公債償還の一方法として案出したものを嚆矢とする。此事は米國の W. F. legarquist 教授の "Investment Analysis" の中にも「The history of the Sinking fund extends back to 1716, when England's Sinking fund plan was created. There is a considerable amount of literature on the Sinking fund, as applied to National loan」と解說して居る。ワルポールは當時英國の六分利公債が五分利公債に借換へられて生じた剩餘金に租稅收入の一部を加へて基金とし、之を以て戰時公債五千五百萬磅の元利金支拂に充當する考へであつたが、此の基金は何時しか恣に減債の目的以外に流用されて折角の大計畫に忽ち頓挫を來たし有名無實に終つて了つた。其の後一七八六年に至つて矢張り英國のリチャード・プライス（Richard Price）が新減債基金制度を發表して例のピット宰相の採用する所となつたのが今日の所謂減債基金の基礎を造つたと謂へよう。此の制度は每年國庫から壹百萬磅づゝを支出して減債基金とし、此の基金を以て豫め定められた方法に依り適宜公債を買入れて行くのであるが、其の公債は現狀の儘

(即ち消却せずに)基金に編入する、隨つて是に對する利子も當然基金の一部として積立てられる。之を毎年繰返して行けば右の利子が複利式に累積されるので、學者は此案に『減債基金の複利論』と命名した。併し是にも相當有力なる反對說があるから其の可否は容易に斷ぜられない。唯だ當該債券の所有者としては如何なる減債基金でも之れ無きに優ると勿論であると云ふ事だけは言ひ得られる。社債の減債基金の起源は公債のそれの如くに明らかでないが、米國では既に一八九三年並に一八九四年當時のレールロード•リシーヴアーシップ(Railroad Receivership)が何れも鐵道會社に依つて減債基金附の社債が發行された事を立證して居るから、同國に於ける公債の減債基金と相前後して實行されて居つたのかも知れない。因に米國が初めて公債の減債基金制を採用したのは一八六八年頃であると言はれて居る。

(三) 社債の減債基金

現今、英米に於て實行されて居る社債の減債基金と云ふのは、發行會社が社債の元利金支拂を確保する爲めに毎年一定率又は一定額の現金若くは有價證券を基金として積立てゝ行くのである。私の手許にある若干の參考書に就て社債の減債基金の意義如何を檢覈して見ると、前揭 W. E. Lagerquist 教授の "Investment Analysis" には「社債券が發行される時は大概減債基金の事が規定される、それは當該社債の元利金支拂を容易ならしむる爲めに發行會社の收入金の中から一定の金額を一定の時期に取り除けて積立てる事である」と書いてゐる。同じく米國の A. S. Dewing 教授の "Financial Policy of Corporations" の中には「社債償還の爲めに必要なる準備金は屢々減債基金を以て充當される、此の基金は發行會社の收益金の中から毎年一定の額を取り除けて積立てることに依つて設定される」と書いてある。又英國の G. Lisle 氏の "Accounting in Theory and Practice" の中には最も簡明に

A sinking fund is a fund set aside out of assets and accumulated at interest for the purpose of meeting a debt.

と書いてある。

要するに社債の減債基金は社債の元金償還及び利子支拂の爲めに會社の收入金の中から一定の額を優先的に取り除けて積立てる事であるが、是には普通二つの方法が行はれて居る。即ち會社の決算に於て利益が有れば毎年一定率又は一定額の現金又は有價證券を積立てると云ふ方法と會社の決算に於て利益が有つても無くても毎年一定率又は一定額の現金又は有價證券を積立てると云ふ方法である。後者は言を換へて云へば會社の營業成績の如何に拘らず一般の經常費同樣に毎年一定率又は一定額の基金を强制的に積立てさせる譯であるから、社債權者としては誠に申分の無い制度であるが、實際は何處でも然う理想通りには巧く實行されて居らない樣である。隨つて現在では前者が一般的に廣く行はれて居るが、此の方法に依るとしても種々異つた型がある。

(四) Serial Debentures

米國の E. S. Mead 博士は其の著 "Corporation Finance" (1930) の中に『減債基金のタイプ』と題して「減債基金のタイプを二種に分けると第一は會社が毎年一定の金を受託會社に對して交付する場合であり、第

二は會社が毎年一定の時期にシーリアル・プラン（Serial plan）に依る社債を發行する場合である」と記述して居る。第一の場合は次節に於て説明するが、第二の場合はシーリアル・プランに依る社債即ち Serial Debentures の發行を認めて居る英米の如き國でなければ實行し能はざる事である。隨つてそれを認めない我國では無論現實の問題としては考へられないけれど、社債の減債基金を研究する一つの參考資料として紹介すると斯うである。シーリアル・プランに依る社債とは或る豫定の額を限度と定めて一組とし其の一組を幾つかに分けて分割發行する社債の謂ひである、換言すれば我國の社債の如く最初に其の總額を確定して全部一度に發行することなく、或る豫定の額を限度と定めて其の範圍内にて必要に應じ何回にも分けて分割發行し得られる社債であり且つ社債の減債基金の制度とは相依り相扶ける間柄に在る誠に重寶なる社債である私の恩師である英國の A. F. Topham 先生の編纂に係る "Palmer's Company Precedents" の第三卷 Debentures and Debenture stock の中の Form 36 にも「This debenture is one of a series of like debentures of the coy for securing principal sums not exceeding in the aggregate at any one time」と書いて居られる。斯種社債は英米殊に米國では盛んに活用されて居るが、之を何うして減債基金に結び附けるかと言へば、逐次發行される社債の收入金を逐次基金として繰入れて行く――詰り舊社債の償還基金に充當すべく新社債が發行される譯であるから、我國で謂ふ所の社債の借換に似て非なるものである。

（五）受託會社と信託證書

第一の場合即ち會社が毎年一定の金を受託會社に對して交付する場合とは言ふ迄もなく社債發行會社と社債權者の間に受託會社が介在した場合であるが、受託會社の介在は必ず信託證書（Trust Deed or Indenture）に依つて表示される。左に米國のアメリカン・ユーロツピアン・セキユリテイーズ・カンパニーがギアランテイー・ツラスト・カンパニーを受託會社として社債の減債基金を設定した Indenture の約款の一部を摘錄する。先づ劈頭に

This indenture, dated the first day of January, 1928. made by and betweenm the Aerican European Securities Company, a corporation of the first part (hereinafter called the Company), and Guaranty Trust Company of New York, a corporation of the State of New York, party of the second part (hereinafter called the Trustee), Witnesseth that:—

と當事者（委託者と受託者）を明かにして其の第十四條に

In order to provide a sinking fund for the retirement of bonds of this issue, the company covenant that it will, either by surrendering bonds to the Trustee for cancellation or by providing for the purchase or redmption of bonds in the manner set forth in Article 12 hereof, retire or cause to be retired at least twenty of such bonds during the twelve months period ending the last day of October, 1938. and that it will in the same manner retire or cause to be retired a like number of such bonds during of each twelve months period thereafter:—

と社債の減債基金に關する協定を掲げて居るが、是が英米に於て一般に行はれて居る形式である。

（六）基金の取扱と社債の買入

斯くして社債の減債基金の交付を受けた受託會社は其の基金を何んなに取扱ふかと云ふ事が問題である。Mead 博士は前出減債基金のタイプの第一に對して先づ「What shall the trustee do with the money which is paid to him ?」と自問し更に以下述ぶる如く自答して居る。曰く「受託會社が社債の減債基金を處理する方法は必ずしも一定して居らない。當該社債の一部を特に抽籤した社債の元利金支拂に充當されるが、別に當該社債買入の價額を定めて隨時買入れても可いと云ふならば、減債基金は其の資金に振向けられる。併しながら此の方法に依つて買入れた社債は現形の儘（即ち銷却せずに）受託會社の手許に置いて、其の利息だけが改めて基金に繰入れられるのが常である」と。序でに一言して置きたいのは前述の如く受託會社が社債の減債基金を以て當該社債を買入れる時は先づ例外なく額面價額以上の價額—百弗券ならば百五弗にて引取る事である（是は必ずしも受託會社が社債の減債基金を以て當該社債を買入れる時だけではない、米國では發行會社が社債の償還期を繰上げて所謂期限前償還を爲す場合にも先づ例外なく額面價額以上の價額—百弗券ならば百三弗とか百五弗とかのプレミアムを附けて償還して居る）。

尤も右の外 Indenture に於て如何樣にも約定される。例へば受託會社が社債の減債基金を以て當該社債を買入れたならば直ちに發行會社に送達して銷却して了ふ事もあり、或は受託會社が社債の減債基金を以て當該社債を買入れずに公債又は他會社の社債に投資する事もあるが、近頃は公債又は他會社の社債に投資する事を見合せて矢張り Mead 博士の言はれる受託會社をして當該社債を買入れさせる事が廣く無難に行はれて居る。併し如何なるタイプを採用しても減債基金を定めた社債ならば悉く『減債基金附の社債』と名附けて可いので、之を英國では Sinking fund debetures と稱し米國では Sinking fund bonds と稱して居る。

（七）似而非なる分割償還

以上は現に英米に於て實行されて居る社債の減債基金に就て其の大系だけを述べたに過ぎない。我國でも從來社債に減債基金を附した實例は稀には在つたけれど、何れも唯だ毎年一定額を分割償還の方法に依つて償還すると云つた程度のもので、假令減債基金が積立てゝあると言ふても其の基金は濫りに減債の目的以外に流用されて社債權者としては決して安心の出來る仕組ではなかつた。曾て東京の某土地會社が新聞紙上に麗々しく『減債基金附の社債賣出』と廣告して賣出した社債の減債基金の正體が其の會社自身が何時でも勝手に引出し得られる銀行の當座預金であつたと知つて驚き且つ呆れたが、社債の減債基金を積立てると云ふ事は然んな曖昧なものでなく、更に分割償還とは別個の觀念の上に立つて居る。例へば毎年五月と十一月に金三十萬圓づゝを減債基金として積立てる社債とは其の根本に於て相違がある。後者は即ち減債基金附の社債であり前者は即ち分割償還の社債である。尤も減債基金附の社債であると同時に分割償還の社債である場合が多いけれど、減債基金附の社債即ち分割償還の社

債ではない。

然るに橋本（良平）教授は近刊の『會計』誌上に於て「減債基金の語は社債金額が償還せられるまで毎年その社債の場合にも用ひられる、即ちかゝる社債を減債基金附の社債と稱するのである」と書いて居られる是は何かの考へ違ひであらう。分割償還の社債は矢張り分割償還の社債で斯種社債を假にも減債基金附の社債などゝ云はない事は前述の通りである。例の問題の上毛モスリン社債（總額四百萬圓）は橋本教授の所謂「毎年その一部（壹百萬圓以上）が滿期となるもの換言すれば分割償還制度の社債であつたにも拘らず『減債基金附の社債』でなかつた爲めに其の一部即ち壹百萬圓の償還に行き詰つて我が社債史上未曾有の混亂狀態を呈したのである。是に因つて觀ても「分割償還制度の社債」に對して濫りに「減債基金の語」を用ひられないと云ふことが瞭かに了解し得られるであらう。

（八）社債法改正の要點

偖て最後に特に申述べて置かなければならぬ一事は、英米社債の如き減債基金制度を我國に移植するに就ての成案如何と云ふ事である。それには先づ我國の社債法を調べて見る必要がある。第一、我國の社債法に於てシーリアル・デイベンチア（Serial debentures, or bonds）を認めるか否かゞ先決問題である。第二、シーリアル・デイベンチアを認めるとすれば是に關聯するオープンエンドモアゲーヂ（Open-end mortgage）をも當然認めなければならぬ。第三、社債の償還期を今日の倍以上に延長する必要がある。第四、株主が社債權者に對して優先的の利益を與へる即ち株主が受くべき利益配當を減額して成るべく努めて社債權者の爲めに減債基金を積立てると云ふ雅量が無ければ不可ぬ。第五、減債基金の管理者は其の責務を完ふする上に於て遺憾なきを期する爲め假にも委託會社即ち發行會社と妥協的態度に出ることは斷じて禁物である。更に社債の減債基金が當該社債の元利金支拂を確保する爲めに積立てられてある以上其の基金に對して社債權者は萬一の場合別除權を主張し得られる優先的地位に置かれなければならぬが、是れが爲めに我が社債法及び其の關係法規を如何に改めるかと云ふ事も亦大きい問題であると思ふ。是等の事は別の機會に讓つて置く。

ASIA'S REPORT OF RECENT ARRIVALS

統計學雜誌 創刊——第八十號迄揃 三五、〇〇

本誌は明治十九年四月杉享二氏主宰の下に初め「スタチスチツク雜誌」なる名稱で發刊され後第六十九號より統計學雜誌と改め今日に至れるもので、杉享二、岡松甥、今井藤四郎、小林龜太郎、高橋二郎、中村東一、今井武夫、寺田勇吉、宇川盛三郎、横山雅男、吳文聰、水科七三郎、河合利安、吳秀三、世良太一、相原徹、岩井德次郎等當時活躍せる統計學界の權威が幾多の論說表記、雜錄を發表してゐる。

目下小店に在庫する部分は此の最も稀少とする「スタチスチツク雜誌」時代を完全に保存せるもので本邦に於ける統計學資料として蓋し逸する事の出來ない好文獻である。

改元堂よきう

アジア書房

大阪・櫻橋

電話北四八二〇番

振替大阪八〇七〇三番

ワアヅワスの『ルウシイの詩』について

遠藤悠

ワアヅワスは多作の詩人であるのに拘らず、戀愛詩を殆んど書かなかつた。この點が彼を平凡な隱遁的生活を送つた退屈な詩人にし、所謂「ライダル山の聖者」を想像せしめるに與つて力あることは否めない。

然し彼は決して冷血の詩人ではなかつた。ハアパー教授(G. M. Harper)によつてなされた新研究は、從來の誤れるワアヅワス觀を打破し、彼が反つて優れた熱情家であつたことを立證してゐる。たゞ彼は自らの熱情を怖れ、それを抑制すべき必要を感じた。彼が戀愛詩を書かなかつたのは、彼が戀愛を知らなかつたからではなく、戀愛を喪んだからでもない彼はその主義とするところがあつたがために感情の自由奔放な湧出を自ら許さなかつたからに過ぎないのである。

かゝる意味に於いてこの「ルウシイの詩」(Lucy Poems)は彼の詩中例外とも云ふべき唯一の戀愛詩である。彼は他では洩らさなかつた戀愛のパッションをこの詩中にはじめて洩らしたものであるが故に、そこにはより深き感情の閃きがあり壓縮されたる情熱の迸りがある。この詩に於いて、彼ははじめて戀愛に對するいみじき性格の一面を示してゐる。彼の詩はこれあるがために生き、彼自身も亦これあるがために生きたと云つても敢て過言ではあるまい。何んとなれば、若し彼にしてこれら一群の可憐なる作品がなかつたとするならば、他の點に於ける偉大にも拘らず、吾々は何かしら彼に物足りなさを感ずるであらう。かく考へ來る時「ルウシイの詩」は吾々に多大の興味をそゝらずにはゐない。

一

「ルウシイの詩」は一七九九年の冬、詩人が獨逸のゴスラー滯在中の作で五つの短詩より成つてゐる。作者は元來、これ等を無題の儘にして置いたのを、後世の編纂者が纏めて「ルウシイ」なる題を附けた。

これら「ルウシイの詩」は疑ひもなく戀愛詩である。そこには清純珠の如き至情がある。肉感的な戀愛でなく、その精神的な、寧ろ宗教的とも云ひ得べき要素の凝つて珠玉の觀をなす詩である、而してそこに壓縮されたる情熱を見出す時、吾人は詩人がどれ程の熱情を以てこの筆を執つたかを想像することが出來る。

この詩の作られた一七九九年の冬は近年稀なる寒さで、詩人は語るべき友もなく、襲中も寂しく、あまりにも孤獨な佗びしい日々を送つた。異國の旅舍にあつた詩人は、かゝる狀態の下にあつて故國を懷しむ情そぞろに切なるものゝあつたことは云ふまでもない。「ルウシイの詩」はこの間に生れたもので、詩人當時の心境と思ひ合せて興味深きものがある

由來說明好きの彼にも拘らず、これらの詩については何等說明の辭をも殘してゐない。ためにそこに描かれたる清純無垢な田舍乙女——人の世の汚塵を遠く離れて、自然の溫かい懷に育ち、月の光、泉の音を唯一

の友として暮す自然の寵兒――が實在の人物であるか、又は詩人の想像の産物であるかについて、更に實在の人物であるとしてもそれは果して何人であるかについては、種々な臆測が行はれてゐるのみで確たる事は知るべくもない。從來この乙女は、詩人の妹のドラシイがモデルであると信ぜられてゐた。勿論かく信ぜられるについて根據がない事はない。例へば詩人は他の詩中に於いても、彼女を呼掛けの對象としてゐる事がよくある。その一例はかの "Tintern Abbey" の詩に見出し得るであらう。これ程詩人達兄妹はその詩に於いても密接である。ドラシイが兄に與へたあらゆる方面に於ける貴重な助力を思へば、詩人がかくばかり情熱の筆を以て、彼女の面影を描いたと見るも、强ち理なきこととは云はれない。

ところがワアヅワスに關する新しい研究を公にしたハアパー教授は、詩中の乙女は詩人が一七九〇年佛國に滯在中戀愛關係に陷つた佛國婦人マリ・アン（Marie Anne Vallon, called Annette 以下アンネットと呼ぶことにする）であるとなした。この婦人と詩人との交渉の發表されたことは詩人の生涯の解釋に對して一の新しい光明を投げかけたものである。詩人はアンネットとの間に女兒さへ設けてゐたけれども、種々の事情のために結婚するに至らず、この問題は長い間詩人の心を苦しめたものであつた。寒氣嚴しい冬をゴスラーの旅舍にあつて侘びしい日々を送つた詩人が、去りにし時を追想してこれらの可憐なる小曲を作り出したと想像するのも亦故なきことではない。

然しまた一歩飜つて考へる時、この想像には幾分の無理のあることを發見する。前述せる如く描かれたる乙女は清純なる田舍の處女である。且つそれと同時に、この乙女は英國の自然の中に育つたといふことが所所に於いて極めて印象的に强調されてゐる。英國は詩人にとつて忘れ得ぬ故國である。殊にゴスラーの旅宿にあつて、寂寞に堪えぬ思ひをしてゐる詩人にとつては、思慕の情禁じ得ざる故國である。異國にある詩人の心境を想像し、描かれたる乙女の俤を彷彿する時、この乙女を佛國婦人であるとするのは果してどうであらうか。

また他面、詩人のアンネットとの戀愛關係に對する態度について見ても、この詩に描かれたる乙女を彼女であるとするのはどうかと思はれる詩人はこの戀愛事件に對して追慕の念を抱くよりも、寧ろ悔恨の念を抱いてゐた。アンネットとの交渉をもつてより以後の詩人は、ひたすら過去に責められ、過去の思ひ出は常に懊惱の種となつた。種々の事情から結婚を沮まれた二人の關係が圓滿に落着するまでには相當の長い時を要した。その間には相手に對する詩人自身の感情も變化せざるを得なかつた。かくの如き種々の事情を考慮すれば、詩人がこれ程の愛惜、これ程の追慕を寄せてゐる相手は、アンネットではないやうに思はれる。悔恨の種となつてゐる女がかくも清純な優しい追慕の對象となり得ないことは明らかであらう。

かかる種々な點より推して「ルウシイの詩」に描かれたる田舍乙女は詩人の初戀の相手ではないだらうか。優しくも胸に秘めし初戀の思ひ出――異國の旅舍にあつて懷鄉の念禁じ難く、且つアンネットとの關係に深く惱んでゐた詩人は、寒夜爐邊に沈思して遠い過去の中に、一點の燈火の如く微かに輝く初戀の思ひ出を新たにし、湧然と起る愛惜追慕の情を微韻幽艶の言葉に託したものではなからうか。勿論初戀の相手が誰で

あつたとも告げられてはゐない。然し吾々は、この詩人の若い日の記錄の中に、それ程の美はしい綾絲を織り込んでもよいやうな氣がする。彼の作品を仔細に檢討すればする程、吾々は詩人が若い日に相當自由な寧ろ放縱な生活を送つたことを知らされる。初戀の存在を想像するのも決して滑稽ではない。而して「ルウシイの詩」に於いて、詩人がその相手を追慕したものとするのも、亦決して彼に妥當しない想像ではあり得ないであらう。「ルウシイの詩」は單なる想像の産物であるには餘りに切實なる感情を有する。惻々として迫る力は、その眞實性から由來するものでなければならない。且つワアヅワスは多くの場合、決して單なる想像に詩作のインスピレイションを求める詩人ではなかつた。彼の作は多く事實に基いてゐる。彼は事實の記錄者である。この解釋にして誤りがないとするならば、これ程の切實なる「ルウシイの詩」は必ずや事實を基礎とした作品でなければならないだらう。

二

先づ五篇の中、"Strange fits of passion have I known" を以て始まる詩は、戀する者のある瞬間の心理を極めて印象的に捉へた作品である。

愛する乙女が、水無月に咲く薔薇の如くいとも艶やかであつた頃、月影淡き夕まぐれ、馬に乘つて慣れた道をその戀人の家の方へと向つて行く。かろやかな蹄の音――心は何時しか甘美の夢に入る。月は次第に傾き戀人の家に近づいた頃、その屋根のかなたに沈んでしまつた。その時彼はふと恐ろしい想像に打慄へる――若しかしたらルウシイは死んでゐるのではないか知ら。――戀する者は時として愚かな取り止めのないことを考へるものだ。

女の死を豫想して恐れる感情は、實際女が死するときより切實なものとなる。詩人は今孤獨の嘘邊に思を凝して、曾つての日、故國の佗びしい田舍に、知る人もなく、まして愛する人もなく、生きてそして死んで行つた可憐な少女を思ひ出す。遠い昔の事である。然し詩人の胸に殘された印象は年と共に強くなる。人も通はぬ野路の果て、タヴの泉のほとりに生を享けた彼の乙女は、眞に淋しく果敢ないものであつた。美しさを讃ふるものもなく、愛しいつくしんでくれる人もない。苔蒸す岩の陰に、人目を憚かるやうに咲いてゐる菫のやうに、又空高く唯つた一つ淋しく輝いてゐる星の光のやうに、美はしくも佗びしいこの乙女の運命であつた。人に知られずして生き、又知られずして死んで行つた餘りにも佗びしい乙女、いま冷い墓石の下に永劫に眠る彼女を思ふとき、詩人の胸には萬感交々到るのであつた。これが "She dwelt among untrodden ways" を以て始まる詩の主意である。

用語は例によつて簡潔、裝飾的な詩句を排したワアヅワスは、この詩によつて自らの主張の最も美しい具體化を示してゐる。これ程の單純、無裝飾の用語を以て、これ程の情緒を描き出すに功を收めてゐる彼の非凡の力に今更ながら驚かざるを得ない。三聯より成るこの詩の最後の聯に於ける終り二行の如きは、到底譯筆の傳へ得ぬ妙味を有してゐる。

But she is in her grave, and, oh,
The difference to me !

語は極めて簡單である。而もこの數語の有する含蓄の深さは、容易に味ひ盡せぬものがあらう。詩人は鬱勃たるパッションを制して、その極

めて僅かを洩らしてゐるに過ぎない、而も吾々をして迪らしめるこれ等情熱の滴は、相連つて美しき珠聯をなしてゐる。そこに吾々は凝結されたる情熱と高揚されたる戀愛の純眞なる姿を見ることが出來る。

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye !
——Fair as a star, when only one
Is shining in the sky.

靜寂な、美しい自然の懷に育つた愛すべき乙女の全貌を形容して憾みなきこの數行の中にも、如何なる裝飾的な文字をも見出し得ない。そこには極めて卑近なる言葉のみが用ひられてゐる。而もこの表現の有する魅力は幾百の麗句もこれに及ばぬものがあるだらう。

詩人の心は佗びしき異國の旅舍から故國に曾つて住みし女の面影に歸る。"I travelled among unkown men" を以て始まる詩にあつては、愛する女と故國を追慕する情とが互ひに美しく融合し、そこに渾然たる趣を釀し出してゐる。女と切り離し得ない故國、故國と切り離し得ない女——これがこの詩をなす切實なる感情である。

故國の岸を離れて、始めて自分が故國に對してどれ程の愛情を抱いてゐるかを知つた。知るべもない外つ國の旅はそれ程自分を故國に牽きつけた。それのみではない、追想すれば自分が戀の歡喜を初めて味つたのも、故國の田舍の山邊であつた。愛する乙女が糸を紡いだのも、英國の田舍の淋しい爐邊であつた。ルウシイの無心に遊び戯れし樹蔭のあたりも眼前に浮んで來る。彼女が臨終の際に、永久に閉ぢなんとする眼で、しげしげと眺めたのも、英國の廣々とした綠の野であつたのだ。——

Among thy mountains did I feel
The joy of my desire ;
And she I cherished turned her wheel
Beside an English fire.
The morning showed, thy nights concealed,
The bowers where Lucy played;
And thine too is the last green field
That Lucy's eyes surveyed.

この詩の第二聯の初行に、

Tis past, that melancholy dream!

なる句がある。これは果して何を意味するであらうか、恐らく長年の間詩人の心を苦しめたアンネットとの關係にそれとなく言及したものに相違ない。事件が漸く落着してみれば、それは一の夢に感ぜられる。しかも "melancholy dream" である。もうこれは既に過ぎ去つた事だ、忘れてしまはねばならぬ。——この一行はかかる意味を表したものと思はれる漸くにして重荷を下した詩人の沈痛なる溜息をそこに聞き得るではないか。詩人はアンネットとの事件についての心の惱みを取り去り得るときになつて、ふと遙かに遠い昔の初戀に思ひを走らせる。それは何とはなしに彼の心を靜め、慰める力をもつてゐるからだ。ゴスラーに在る當時の詩人が、故國の田舍にありし淋しき乙女を今更ながら慕ふその心情の極めて當然なるを見ることが出來るであらう。

三

ワアヅワスの作品には「自然の教育」(The Education of Nature) と云ふ思想が到るところに强調されてゐる。彼が自然の詩人と稱せられるのは、彼が單に自然の精細な觀察者であり、溫い同情者、理解者であつたからのみではない。寧ろ自然をある意味に於ける教師とする彼獨特の思想の故であらうと思はれる。「自然の教育」と云ふ思想は、彼のこの根本思想から必然的に由來するものである。

彼は自然の中に遍在する一の高い存在を認めた。一言にしていへば神である。しかし神といふ語が普通に意味するよりもより廣い概念に於いてである。自然界の萬象はいづれもその現はれである。一木一草悉く異つた狀態の下に於ける、その具體的な顯現であると見た。この點、萬物を以て直ちに一の神性と見るシェリイなどの汎神論と聊か趣を異にするワアヅワスのは嚴格には汎神論とは稱し得ない。彼にとつて神はどこまでも一である。自然界の萬象はその一なる神が種々の形をとつて姿を現はしたものに外ならない。故に自然界の萬象は、その背後に於いてある高次なる存在と連絡する、彼等すべては究極に於いて、より高い存在に統一せられてゐるのである。而して彼はこの統一體に、一の倫理性を附與した。かくして彼の認むる高次の存在は、道德的性質を有する神格として現はれる。自然が人間を最もよく教育し得る教師であるとする所以は即ちこの點に基礎づけられる。

彼はこの自然に對するに "Wise passiveness" の態度をとることをすすめる。心を虛しうして、自然が指し示し、敎へる所を視、それを受け容れる所に、人間に於ける人格の向上があり、完全なる生活への途が展開される——彼はかく考へた、この思想は彼の作品を通じての底流である。

而して彼自身自然に教育されて、いかなる心的發展の道を辿つたかは彼の自叙傳的長詩 "The Prelude" に詳細に記錄されてゐる。又かの "Tintern Abbey" を讀むとき、自然に對する詩人の態度の徐々に變化した樣は極めて端的に表現されてゐる。そして無邪氣な少年が淸新な空氣や戶外の自由を喜ぶ感情から、年の經過とともに思想が變移し、自然に對してより深い精神的な愛を感じ、それに一の人間的な屬性を認むるまでの精神內部の委曲を盡せる消息は、明らかなる形に於いて讀者の眼前に展開される。又荒凉たる自然が與へる教育については "Michael" と題する叙事詩がある。熱帶の自然を背景とするものに "Ruth" がある。これ等に於いてすべて自然の倫理性が自在に活躍してゐて、人間は自然の中に包含されたる極めて小なる要素の一と見られる。自然はすべてに於いて大きい役割を演じてゐる。次に述べんとする "Three years she grew in sun and shower" を以て始まる「ルウシイの詩」中の一篇にあつては、自然は更に强調され擬人化されたる形に於いて取扱はれてゐる。

この詩に於いては、自然が表面に現はれる。即ち自然が speaker である。吾々は自然の言葉を通じて、詩人が自然に與へてゐる教育者としての役目を知る。自然の語る所は即ち詩人の思想である。

美しい乙女がある。自然は彼女を見て云つた。「この女の子をわが手にひきとつて養育し、わが思ひの儘に育て上げよう。自分は彼女にとつて法則ともなり衝動ともならう。岩間や野原にある時も、樹の間や繁みにある時も、その他天と地との間のあらゆる所にある時も、眼にこそ見えね、或る力が凝と見守つてゐるのを彼女は感ずるだらう。彼女は野山を

かけ廻る仔鹿の如く快活であらう。馥郁たる香も彼女のもの、言葉なく生なき萬物の沈黙と靜寂も彼女のもの、空に漂ふ雲もその威容を彼女に與へ、芽ぐむ柳も彼女のために枝を垂れるだらう。また吹き荒む嵐の中にも無言の同情によつて處女の姿を作り上げるあの優美さを彼女は見落すことはなからう。小夜更けしみ空の星影も懷かしきもの、人も訪れぬ山深きほとり、滾々と湧く谷川の音にも耳傾け、その囁きにも似た水音から生れ出る美はしさが、いつとはなしに彼女の面に映えることだらうそして生氣に充ち溢れた歡びの思ひで、彼女のたけはすくすくと伸び、處女の胸は波の起伏の如く柔くふくらむだらう。この樂しい谷間にルウシイと自分と二人して住む間、自分はこれらの思想を彼女に與へやう」から自然は云つた。そしてその通り乙女を養ひ育てた。自然の任務は了り彼女は美はしい乙女となつた。けれども乙女は果敢なくも、若さと美とを抱いて死んでしまつた。後にはただヒースの野が、靜かな寂しい眺めを殘してゐるのみ、再び返らぬ在りし日の思ひ出は潮の如くわが胸に迫つて來る。——

これが一篇の主意である。彼の "Lines written in Early Spring" の作の證する如く、彼は自然の感覺性に對して極めて鋭敏であつた。この詩に歌はれたる自然の愛兒は即ち彼自身である。この詩は「ルウシイの詩」中他の詩に於けるが如く、在りし日の乙女の俤を追慕するといふ趣よりも、彼女の清新自由な自然の生活を歌ふに事寄せて、彼自身の理想とするところを表明した趣が深い。從つて純粹の戀愛詩と云ふべく餘りに彼の個人的思想が露骨に現はされてゐる。

また彼が田舍乙女の汚れなき一生を寫す筆はまことに纖細で、微に入り、細を穿つてゐる。この點に於いても他の作と聊か趣を異にする。即ち他の作にあつては、簡潔なる一筆書きの風情で、暗示的效果を擧げることに努めてゐる。けれどもこの詩に於いては、詩人の筆は例になく精細を極め、而も甚だ印象的で、宛も彩色鮮やかなる繪の如き趣がある。溫和なる自然と常住の接觸を保つ乙女の面目は、そのあらゆる角度に亘つて描寫し盡され、生活の全面が明らかなる音と光と香とを伴つて讀者の前に展開される。

この詩に於いて、教育者としての自然は自らの明らかなる姿を見出し自らの地位を意識し、その倫理的使命を完全に果してゐる。それは言ひ換へれば、この乙女が女として、人間として、完全なる生活、憾みなき生活を送つたことを意味するのである。

ワアヅワスの理想はこゝにあつた。彼はかの "Ode on Intimations of Immortality" に於いて、前世の汚れなき光輝を負うて生れた人間が、年を重ねるにつれて俗世の塵に汚され、やがては曾つて己が住みし清淨なる世界を忘れるに至ることを慨いてゐる。この彼にとつて何時までも、生れた儘の純な心を保有し得るのは、自然と間斷なき接觸を保ち、生活のあらゆる點に於て、passively に自然の教へを受け容れて行く生活に於いてのみであると思はれたのである。從つてこの詩に歌はれたるルウシイは、この生活を體現した彼の理想の乙女である。

なほ第六聯の "vital feelings" 云々に關してラスキンはその著 "Sesame and Lilies" の中に次の如く述べてゐる。

There are two passages of that poet [i.e. Wordsworth] who is distinguished, it seems to me, from all others —— not by power,

but by exquisite rightness —— who point you to the source, and describe to you, in a few syllables, the completion of womanly beauty ..... 'Vital feelings of delight' observe. There are deadly feelings of delight; but the natural ones are vital, necessary to very life. ..... Do not think you can make a girl lovely, if you do not make her happy.

四

戀の感情は相手の死によつて、その最高の pitch にまで高められる。ワアヅワスが、僅々八行の詩の中に愛する女の死を歌ひ、あらゆる情熱を籠らしめたところの "A slumber did my spirit seal" の句を以て始まる挽歌がその緊張せる感情によつて、異常なる力を保有することはまたあやしむに足らない。

戀の甘きに醉へる時は、魂はまどろめるが如く、ただ陶然として人間的な恐怖や憂愁の感情をも超越してゐた、そしてわが愛する女は、卑しき地上の時の制限などを受けざるもののやうに思はれた。然るに時至つて女は死んでしまつた。目を醒せばわが前に在りし女の姿は既に消えてなく、女は地下深く永久の眠に就いてゐる。彼女は今や動く力もなく、聞く耳も、見る眼もない。そして岩や樹々を友として、日夜大いなる地球と共に廻りに廻る身となつてゐる。——

それは恰も親友 Arthur Hallam の遺骨を載せて故國に歸る船を思ひ偲ぶテニスンの心境に似たものがあらう。("In Memoriam" IX-XIX) 特に次の行に表はされたる感情はこれとの類似を思はせる。

And hands so often chasped in mine
Should toss with tangle and shells.

或は又 And dead calm in that noble breast
Which heaves but with the heaving deep.

女は死んでも、土となつて朽ち果てることなく、自然界のあらゆるものを友として大地と共に廻轉するものとなつた。戀愛の情はかくして形而上的な境地にまで高められるのである。

更に Rose Aylmer の死を追慕して歌へるかのランダー (W. S. Landor) の挽歌と比較してみるのも興なきことではなからう。

Ah, what avails the sceptred race !
Ah, what the form divine !
What every virtue, every grace !
Rose Aylmer, all were thine.
Rose Aylmer, whom these wakeful eyes
May weep but never see,
A night of memories and sighs
I consecrate to thee.

兩者は共に靜觀と云ふ點に於いて相通ずるものがある。即ち感情の自由奔放なる發現ではなくして、感情の抑制である。けれどもその底流をなす感情の强さを思ふべきである。ワアヅワスの詩は、表面極めて平靜なる態度で女を悼んでゐる。そこには人事を超越した哲人の姿さへ暗示せられてゐる。しかもその詩を誦すれば誦するほど、涙ぐましきまでの愛慕の熱情を見出し得るは、ワアヅワスその人の現はれに外ならないだらう。

——(了)——

學内報

第二學期始業

第二學期授業は大學各學部、大學豫科、專門部各部とも九月十四日に開始した。

第九回夏期語學講習會

本學第九回夏期語學講習會は前號豫報の如く去る七月二十日開講、八月八日を以て終了したかくて八月八日午後六時より講堂に於いて修了式を擧行、仁保學長始め、理事並に講師、講習生一同出席の裡に、仁保學長は先づ各科總代にそれぞれ修了證書を授與し、ついで學長は外國語修得の必要に關する所見を述べて挨拶となし六時四十分式を閉ぢた。

因に各科會員數は次の通りであつた。

英語科	三三四名
獨語科	四九名
佛語科	一二名
合計	三九五名

大禮記念館地鎮祭

千里山學舍敷地内に大禮記念館建設の件は、豫てよりこれが準備を進めつゝあつたが、いよいよ設計成り、大林組の手により工事に取掛ることゝなつたので八月九日午前十時より地鎮祭を執行した。學校側は仁保學長、喜多村、增山兩理事、大林組よりは仁保重役列席、定刻伊弉諾神社神官の修祓降神の式に始まり、型の如く式を進め、地鎮の儀を終り、學長以下玉串を捧げ十一時崇嚴裡に式を閉ぢた。

第九回夏期語學講習會修了式（學長が修了證書を授與するこころ）

因に同記念館は木造平家建、二百餘坪竣工は來年一月の豫定である。

教練教官の移動

本學教練教官伊村長吉氏は八月一日附を以て歩兵第八聯隊附被仰付、第十六師團參謀陸軍歩兵中佐横山鎭明氏が歩兵第八聯隊に轉補の上本學教練教官として來任せられた。

宇佐見舊講師の學内講演

歐米裁判事情視察を了へて最近歸朝したる宇佐見六郎氏は七月十一日午後一時より天六學舍第二十五教室に於て專門部第一部生の爲に「英國の近狀」と題してフーバーモラトリアム案の英國事業界に及ぼせる影響歐亂十三年後の今日戰禍漸く薄らぎ、演劇、讀書界に「戰爭の思出」の大いに受けられてゐること、對獨、對佛感情やうやく和ぎ、軍縮に努力してゐる點、勞働黨内閣の財政、失業問題に對する窮境等を平易に解示され、「英國の現狀」を知らんとせば議會政治を研究理解することが最も肝要であると述べられた。

學内消息

新町德之氏（教授）中部支那（江蘇、浙江、安徽、

江西、湖北）の主要都市の文化視察を終へて八月二十六日歸着。

森川太郎氏（講　師）尼崎市西櫻木町五六に轉居。

寺井一男氏（庶務課）住吉區旭町一丁目三五に轉居

訃　報

吉田理事令孃――本學理事吉田音松氏長女朔子孃は急性腹膜炎にて七月八日より大阪帝大病院に入院加療中のところ同月十七日遂に永眠された。

校友彙報

兵庫支部

「齋藤博士渡歐送別會」開催

校友會兵庫支部にては六月二十一日午後六時より、母校講師齋藤常三郎博士の渡歐せらるゝに當り一夕の送別の宴を神戸市中山手海運クラブに於て開催した。集るもの齋藤博士を初め左記三十四名、十二分の歡談を盡して午後八時散會した。

出席者

齋藤常三郎氏

井上　巧　伊木貞市　生島藤藏　原田鹿太郎

堀上與作　土井美弘　大西一男　岡野重三郎

奥田源次郎　大白愼三　鷲池　勉　賀來俊一

角谷好太郎　田川七郎　谷口隆佳　中山幸市

村上末雄　黒板嘉德　矢能　巖　山下保治

山内　香　山崎敬義　丸谷繁藏　眞柴長三

小泉幸治　合田熊平　出口清一　新井正雄

三雲住三郎　水本信夫　下山　猛　志野覺次郎

清水郡造

朝鮮支部

結成第一回總會

六月十四日午後六時より京城府旭町京喜久に於て朝鮮支部結成第一回總會を開催した。

松本支部長缺席により森井幹事長代りて開會の挨拶として本會の經過及將來の希望につき述べ、次いで野田幹事より各地よりの祝電及祝辭の朗讀ありて懇親會に移る、宴漸く酣なる頃記念撮影をなし一同歡を盡して盛會裡に母校の萬歲を三唱、十時散會した。

因に當日出席者は左の諸氏である。

植野先生　本田孝一　大川正雄　吉田敬治

太宰　明　野田　博　日下部景勝　山本恒夫

大和屋　巖　松田　清　小西頼人　江藤榮七

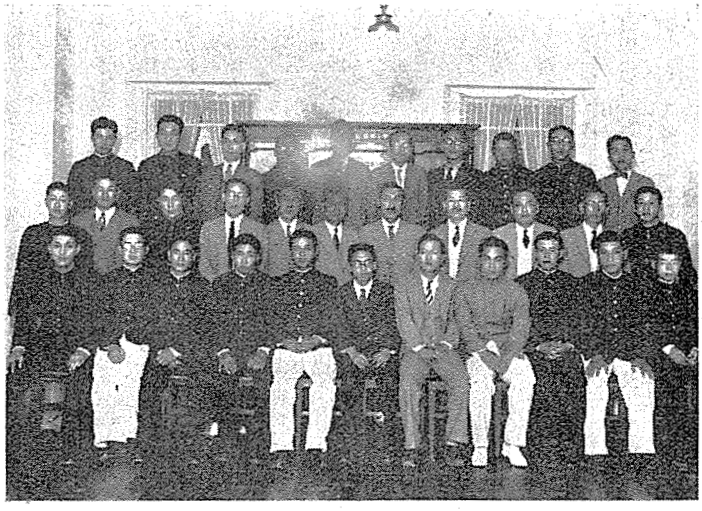
三上吉隆　森井與一郎

母校野球部選手歡迎會

六月十五日午後七時より京城府北米倉町蓬萊閣に於て滿鮮遠征、入城中の野球部選手の歡迎會開催した。

松本支部長の挨拶についで三木マネジャーの謝辭あり記念撮影して宴に移る、野田幹事より出席校友を紹介、次いで選手の自己紹介あり、宴酣となりて校友の一人一藝。選手團の校歌合唱。校友の所望によりて野球部數へ歌と次から次へと盡くる處を知らざりしが十時過ぎ母校の萬歲を三唱して閉會した。

因に當日出席者は左の諸氏である。



校友會朝鮮支部の母校野球部選手歡迎會記念撮影

本田孝一　大川正雄　太宰　明　野田　博
日下部景勝　山本恒夫　松本正寛　松田　清
小西賴人　江藤榮七　三上合隆　森井與一郎
杉山志敏（以上校友）
（學生選手名は省略）

—幹事野田君報—

動靜

有田幸三氏（明四四專經）千里山俳壇選者朝冷氏は東淀川區十三東ノ町三丁目一六番地に於て牡丹書店を開店古本商を營むことゝなつた。

大隅末廣氏（大一二專法）辯護士、事務所を住吉區阿部野筋三丁目五八に、自宅を住吉區天王寺町二〇三二に移轉。

寺尾賢三郎氏（大一三專經）大日本人造肥料會社を辭す

玉置轉留男氏（大一三專經）夕刊大阪新聞編輯局整理部長より同編輯局內務部長に轉任、住所は兵庫縣武庫郡本山村田中字水二五六。

栗本　隆氏（昭六專法）北區堂島上三丁目合資會社ヒノテ商店に勤務

住所移動

磯野充賀（大七專法）兵庫縣川邊郡伊丹町主基町五五二

高谷太治郎（大一一專法）東區木野町三〇

三島律夫（大一一專商）西宮市分銅町一七

藤本峰雄（若狹山梅）（大一五大法）東區道修町一丁目八

石田三郎（大一五專商）西成區粉濱本町三丁目一五

山下喜代志（昭二大經）京都市右京區太秦町桂ケ原一七ノ一

加貫田慶治（昭二專文）神戸市原田七一〇ノ一、

西川英三（昭三專商）神戸市籠池通三丁目一〇四、松井方

松田儀郎（昭四專經）東成區大宮町五丁目六四

雨村是夫（昭五專法）豐能郡豐中町新免字北屋敷六五三、佐井助治方

石井　務（昭五專商）西淀川區大仁本町二丁目六一

奥澤澄三（昭五專商）三島郡吹田町濱田二七一九

久井忠雄（昭六六法）東京市外淀橋町角筈七〇四高部幸吉方

津川鑑一（昭六專經）東淀川區十三西之町三丁目五五

元木芳三（昭六專經）福山市外草戸村

改姓名

（舊）　（新）

昭六大經　中村淳一　尼崎淳一

訃報

花井壽造氏（大九專法）辯護士

昭和六年八月二十五日逝去

學生彙報

哲學會

去る五月九日(土)午後一時本學哲學會は本年度第一回の例會を本館英三教室にて開催した。

當日は御多忙の內にもかねて我が哲學會のために御盡力を下されつゝある藤澤黃波先生を聘し「日本に於ける儒學」と題し約二時間に渡る貴重なる御講演を賜つた。終りて先生を中心に諸質問を爲し四時盛會裡に散會。會するもの哲學科關係諸教授を始め學生諸君であつた。因に當日に於ける先生の御講演は大要次の如くである。

日本に於ける儒學　藤澤先生

儒學の本源は支那にあつてその思想學說も自ら支那に胚胎するから先づ支那の學問の沿革に就て一言せなければならぬ。先づ一期は孔子以前の時代で即ち之は實際に行ふた時代である。此の時代の凡ての文化は六經によつて之を知る事が出來る。六經とは詩・書・禮・樂・易・春秋である。二期は孔子以後である。此の時代にあつては諸子が自分の學習を專らにし且つ爭つて門戶を立てた。之等は漢書によつて知る事が出來る。而してこれ等の學問は子貢、荀子を經て漢に傳はつた。漢

以後は專門的となり。解釋となつたのである。即ち訓詁の學として現はれた。

其處で唐の太宗の時『五經正義』を作り解釋を統一したのである。宋に至りて周茂叔から二程子即ち程明道、程伊川の兄弟にいたつて『大極圖說』『定性書』などの書を著し、誠を以て本とし窮理を以て主とした。續いて朱熹となり理氣の說を大成した。陸象山と尊德性道問學を論じて朱子は道問學を重んじ、陸は尊德性を貴んだ。之は所謂頓悟である。明時代には王守仁陽明の學が起つた。陽明は知行合一を主張し、致良知を說いた。清時代は考證學の時代である。以上大體は支那學問の流れである。而して日本では初め漢唐の學を傳へ所謂五山の徒に傳へられて居る間は甚だ單純であつたが、德川時代に學問が盛んになるに及び第一に朱子學が起つた。これは藤原惺窩、林羅山等によつて唱へられ、遂に德川政府の官學となつた。又王陽明の學も考證家の說も行はれたが特に我邦に起つたものは大なるものが三つ、小なるものは林の如く多くなつた。即ち宋儒の說に甘んじないで、直ちに周公孔子に就かうとする古學といふものが伊藤仁齊、物徂徠等によつて唱へ出され、また水戸學即ち光圀公によつて起された大義名分を明にする學問がある。此三つは我國に特に生じたるものであつて支那にないものである。今近世儒學者の著名なものを表示すれば次の如し。

（表は編輯の都合上省略す）

水戸學派は義公が朱舜水を聘して倫常を明にし、又大日本史を修められ大義を明にせられた。其主旨は孔道館記なるものに述べられてある。即ち道とは天地のしばらくも離るべからざる道である。忠孝無二文武不岐學問事業不異其効と解いて神州固有の道を奉じて西土の教を資るのであるとある。

道は古註にあつては、道謂禮樂或は扶持萬物使各終其性命者也德也得於身也といひ、宋學では道をば事物當行之理と說き、德を行道而有得於心也と解せられてゐる。伊藤仁齊は道を道猶路。人之所以往來也。人倫日用當行之路と說き、德を仁義禮智之聰名であり、道以流行言德以所存言と述べてゐる。徂徠は道を先王安天下之道、禮樂刑政其物也といひ、德を謂人各有所得於道也と說いて居る。又宋學では仁とは心之德愛之理とか、人欲淨盡而天理流行と說き、徂徠は長人安民之德是聖人之大德也天地大德曰生。聖人則之故又謂之好生之德と解いてゐる。義禮智信は朱子學に於ては之を皆人の性にあるものと爲し、性を以て理となし持敬主靜、良知良能を說いて其性を守る工夫として居る。即ち朱子は義は心之制事之宜といひ、徂徠は先王所立道之名也といひ、仁齊は爲其所當爲而不爲其所不當爲之謂義といふ。朱子は禮とは天理之節又人事之儀則といひ、仁齊は尊卑上下等威分明不少踰越といひ、徂徠は禮は道之名也といふて居る。此禮樂とは左傳に名分秩序を以て說いてあつて、國家を條理づける法則を指して居る。之を要するに朱子は義禮智みな天理人性と說き、仁齊は道德の名にして性の名にあらずと說き、徂徠は仁智は德なり、禮と義とは道の名なり、と說いて居る。この義禮を以て人の性とか德とか解釋するのは無理であると思ふ。支那には老子、莊子の道が實際に行はれて漢以後と政治風俗の重要なる關係を作つて居るが、我國には此說を奉じて信に國家を治めやうとしたものはなかつた。而るに近時に至つて共產主義と黑子、老子、莊子の說と大いに其の似るところあるを以つて近頃は之と共通を認めて大變な勢ひで研究してゐる學者もあるが、久しく顧みられなかつた老莊が頭を上げたのは幸か不幸か、或は思想上一度はかくなるものと思はれるが、我々は是非水戸學の研究をすゝめたいと思ふ。我が家にあつて東晧翁の原聖志及び『思問錄』と父の政、道、教論の三篇とが我が家の主張を知る事が出來やうと思ふのである。

例會及懇親會

六月五日大學記念日午後三時より我等は第二回の例會を天六學舍教授室に於て開催した。三枝樹先生は先般來の支那視察の所見に就て述べられた。

先づ先生は豐富なる材料の下に天津、北京に於ける勉學の便より說き起され、支那生活、進んで彼の地に於ける大學、小學校、師範小學校に於ける制度、設備教育、狀況等に就いて語られ、併せて、朝鮮の小學校の教育に就ても言及され、直接持參された參考資料に

よつて示され、一同益するところ甚だ多大であつた。

同日例會終るや引き續き同六時より戎橋北詰『いく代』に於て春季懇親會を開いた。當日は新入會員竹內眞廣、細原の三君を交へて一同歌ひ、飲み一夕の歡を盡くして午後十時過ぎ散會した。—(平井君報)—

佛教青年會

仁保學長の佛教青年會に於ける講演

學長仁保龜松氏は、去る六月十一日本學佛教青年會の講演會に臨まれ、入信談と云ふ標題の下に一條の講演をせられた。その大要次の如くである。

先づ最初宗教の存在意義を問ひ、『人間の心的活動樣相をカント學派に從つて分つならば知情意の三つである。而して此の三者の各々に對應する學問として諸種の科學が樹立されてゐる。然るに人間の心的活動には此の三者以外に信ずると云ふ作用がある。——信ずることを三者の中に含ましめるならばそれでもよいが私は之を別孤に引き出す方がよいと思ふ——然れば亦信ずると云ふ作用に對應した學問が樹立されねばならぬ此の觀點から樹立された學問を宗教と呼び得るならば少くとも宗教がかゝる意義を持ち得るならば、宗教は存在意義を持つのである。此の故に宗教は科學的に見て基礎付け得られると思ふ。それは吾人の知識に限界があり、從つて未知の世界と既知の世界を區分して考へられる。然るに吾々の理性は未知の世界を究明しようとする欲求を、本來的に持ち、之を漸次明にする事によつて既知の世界の領域限界を擴張するが、而し尙未知の世界に對しては所謂「信ずる」ことによつて之を自己のものとするのである。是、吾々の知識に制限あり、その制限あることによつて信ずべき世界が存在する。かゝる世界の存する以上は信ずる作用は滅しないから、此の信ずる作用に對應する宗教の存在することも亦當然であらねばならぬ』と。その科學的基礎を確立して自分の入信動機の一つを明にせられた。次いで、家庭的不幸即ち、只一人の御令息を亡くされて其の追弔儀式に關する出來事により、宗教殊に佛教の人間生活に活きた力として正しき意義を有することを發見せられし點に說き及んで、人間生活に基く宗教存在の有意義を愈々明にせられた。

以上の動機よりして宗教の是認と、引いて現在自己の有せられる、宗教そのものに對する見解、即ち『機教相應は釋尊說法の要諦である。釋尊五拾年の說法が五時に分たれ八教に大別される事は、時代と民衆の要請に基く所謂對機說法の原理に基くものである。然れば法を求むる者は自己の機根に相應したる教理を選ぶべきであつて、その一つを取ると共にその足らざるを他に求めて補ふことにより、自己の信念の確立を期すべきである。是法然の說く選擇の原理である。各宗各派の祖も釋尊所說の諸法中より選擇されてその教へを立てたに相違ないが、多くの聖祖は自己の樹立した教理の完全を或點まで是認したのである。然るに法然は最後までその所說の不完全を主張し、理論を離れてひたむきに信仰することを進めそれはやがて選擇主義を以て自ら甘んぜられた如く、吾々も、吾々の時代と自己の根機に適應せるものを把握すべく諸の教法中より諸法を選擇し、その不完全さを補つて自己の信念を確立すべきである』とて淨土教の鎌倉初期に於ける民衆の要望に相應せる主張と、日蓮の元寇期の民衆に相應せる主張を比較されて根機相應と機教相應に基く求信者の選擇を明にして以て吾人の宗教に對する態度に一大指針を示された。

而して最後に佛陀觀と宗教利用の問題に進み、『佛陀は吾々の安心立命と修養の基準である。私は只一人の子供を失ひ、自分の內面に滿ちてゐる愛情を注ぐに由なく、幽冥境を異にせる子供に對して如何とも致し方なきを知りつゝ尙愛情は胸に滿ちて居るのである。そこに於て眞に自分の子供に對して、吾に代つて愛を注いで呉れるのもを求めたとき、無量の光明を放つて大慈悲を垂れ、一切衆生を我子の如く憐愍し玉ふ佛の働きは實に力なき吾に可能を與へ、自分の子供に對して其の愛を注がせ玉ふ人格である。私は、此の人格に信通して以てそこに安心の境に達したのである。』とて阿彌陀經の、「彼佛光明無量照十方國、無所障礙——彼佛壽命及人民無量無邊」の語や又法華經の「慧光照無量壽命無數却」等の言葉を引用せられその語の解明

よりして悲智圓滿の人格佛を彷彿されたのである。

『扨て然らばかゝる宗教或は佛陀は如何に人間生活の現實に利用されるや。既に言へる如く吾々の心的活動は知情意信であるが之等の活動は最も正しき活動狀態を意味する。然るに現實に於て吾人にあつては愚痴、瞋恚、貪欲等によつて不純化されてゐる。此の兩者の對立こそ吾人に修養の基準を與へるものである。吾々が自己の修養の基準を人間に於て求むるとき、知的情的意志的の三者を完全に具備せる人を得ることは至難である。否眞に理想的人物は皆無である。然るに佛は人格圓備の對象であり、吾々は之を基準として自己の修養に努めるならば、宗教は人間生活の現實になくてならない存在となるであらう』と。

凡て自己の體驗を基礎として論を進められる言々句々は、聽衆の肺腑に徹底せずには止まないのみならずその崇高な人格と溫容な態度とは、會場全體を哀々たる雰圍氣に包まれた。—(杉本記)—

高野山行

七月十三日雨　會員は八時四十四分の難波發電車にて高野山の極樂橋についた時は十二時十五分であつたこゝで辨當をたべて雨の降る中を二十八町程山阪を登る。霧雨をくぐり泥水にしたつて靴や上衣はべと〳〵になつて宿泊所親王院に到着した。半時間こゝで休息して二時半より寺院を巡拜した。

大日堂、阿彌陀堂、不動堂、愛染堂、金堂、(大日、十三佛)御影堂(弘法大師六年修業所)、準胝堂、大塔本尊、(大日如來)、西塔(金剛界金佛)土山明神、六角堂の燒跡を拜して大門に至る。折から押し寄する霧大門を包み始めた。そこを出て寶物館に至り佛畫及び經文像を拜觀す、重要なものは次の樣なものであつた。

一心十界の圖、金剛薩埵像、山越阿彌陀、釋迦八大菩薩、弘法大師、曼荼羅、愛染明王十七尊曼荼羅、釋尊涅槃圖、雨舍阿彌陀如來、文殊菩薩、胎藏界曼陀羅金剛界曼陀羅、阿彌陀二十五菩薩、彌勒菩薩、善無畏三藏、一行阿闍梨、細字古版法華經、日蓮聖人筆法華經、弘法大師筆法華經、紺紙金銀字一切經、(三千九百八十二卷の一部分)高麗版一切經、宋版一切經、明嘉上人高野山巡禮記、後鳥羽上皇院宣、高倉院院宣、豐臣秀吉朱印狀。

深沙大將、金剛大將、如意輪觀音、彌陀三尊、毘沙門天王、鳥俱婆伽童子、惠喜童子、惠光童子、藥師如來、大日如來、利多伽童子、不動明王、阿耨達童子、增長天王、愛染明王、持國天王、

等の佛像佛畫經文を觀覽して親王院に戻り風呂に入る夜になつて一層雨激しくなつて來た。九時になつて會長賀來先生が來られて一同大喜びで就寢す。

七月十四日、雨

五時に起床して寺院に御勤めに列して堂を拜し朝食後有名なこの寺院の高僧水原榮舜氏に特に依頼して眞言に就いて二時間半に渡つて講演拜聽し大要次の如くであつた。

人の行は惡業ばかりする所より次第に進んで多少善行をなし次に天を願ふ樣になり之は恰もキリスト教と同じ心の階段までに達し更に人は聲聞とて自分の事のみを考へる階段に至り更に進めば緣覺とて人のことを少々考へる樣になり次第に佛に近づく行爲をして來るかくして第八は天台(一念三千)第九華嚴(現事無礙)第十秘密眞言に達すると。之は弘法の十住心論の經判に書かれある。顯教は眞如一念三千の乾燥無味のもの眞言は空の上の空とて大空を求めるもので例へば鏡を見るに爽かな姿をうつすが顯教であり眞言はそれにうつれる有樣を現はせるものである。曼荼羅の胎藏界は現を示し金剛界は事を示す、之物と心とでありそれを一身におさむれば心である。現相と事相兩々翼の如くある。之を實行するには加業とて二百五十日間行ひその修業中家に不幸起れば、その修業者は惡業因緣あるため修業を中止して下山させてしまふそうである、その次には傳法灌頂をなし傳授する。次には口傳をなす最後に授戒をなす、かくして所謂胡麿をたくことを修業して內部の修道に入り一僧が出來上る。勿論教相は大學で習ふのである。然し水原氏は高野山の俗化してゆくのをなげかれてゐられた。否寧ろ眞言の僧が徒らに形式を習ふてそれを業に於て生活の手段にする者多く實行が伴ふてゐない僧が多く現代では高野山の大學の生徒も僧になるを嫌ひ徒に大學は邪端者を造り出す樣

なものであると云はれ、水原氏は自からこの世相を顧み獨身で不言實行の修養を日々行はれてゐられる由である。この親王院には水原氏の芳名を慕ひ多くの文士や知識階級の人々が宿泊し院の四方にある倉には立派な古書が藏せられてありそれを調べに研究者も來るそうであり、關西大學の佛教青年會も此の院に泊するを得た事は實に名譽の至りである。その講終へて金剛峰寺及び奥の院の弘法大師の廟を拜しほととぎすの一聲を檜の霧の中にきゝつゝ高野の山を下りた。大阪には四時半着し難波驛で散會した。

キリスト教青年會

第十回例會——五月三十日午後七時半天六學舍第二十五教室に於て定期例會を開催す、法二宮地司會者となり讃美歌聖書祈禱を以て始め、片山先生のロマ書の講義に移る。今回は第六章一節より十一節迄の研究をなした。大要を記すれば次の如し

第六章は前章を承けた言葉であつて、第一節の「されば何をか云はん、恩惠の增さんために罪のうちに止るべきか」の言葉は第五章二十節の「律法の來りしは咎の增さんためなり、然れど罪の增すところには恩惠も彌增せり、との言葉を承けたのである。我等は罪の何たるやを知りキリストに由り一切の罪より救はれたる以上最早何時迄も罪のうちに止つておるべきではない罪に就いて死にたる我らは最半其中に生きる事は出來ないのである「なんじら知らぬか、凡そキリスト、イエスに合ふバプテスマを受けたる我らは、その死に合ふバプテスマを受けしを」(六ノ三)、我等は、過去の舊き罪の人より其罪の死に依つて新たなる人となつたのであるから此の後罪に事へざらん爲にキリストと共に歩むべきである。「キリスト死人の中より甦りて復死に給はず、死もまた彼に主とならぬを我等は知ればなり」(六ノ九)我等はキリストの死に由りて一切の罪は死んだのであるがキリストの甦りに由りて新生の悦びを得たのである、斯樣な譯であるから我等は恒に已を罪につきては死にたるものであり、神につきては、キリスト、イエスに在りて活きたる者と思はねばならぬのである。此の罪よりの解放、死より生への飛躍は神と共なる生涯を與へんが爲である。

以上の研究が終つてからも互に神の惠みを證し合つて一同法悦に滿たされて散會す。

第十一回例會——六月二十日午後七時半天六學舍第二十五教室に於て第十一回定期研究會を開く、司會に法二宮地が當り毎もの如き順で讃美歌聖書祈禱の後片山先生の講義に入る、研究個所はロマ書第六章十二節から終りの二十三節迄である、例によつて大略を述ぶれば左の如し。

然れば罪の一切より脱し聖なる世界にに生きる以上は再び罪を我らの死ぬべき體に王たらしめて其の慾に從ふ事なく我ら肢體を罪に献げて不義の器をなさず、唯神に献げ、その肢體に義の器としなければならない我等は今迄の如く律法の下にあらずして恩惠の下にあるのであるから罪は我等の主となる事はない、神の恩寵の如何に廣大なるかを思はねばならぬ、我等は過去を顧みて穢と不法との僕となつて苦しんでゐた事を考へると戰慄せざるを得ない、其結果當然科せらるべき刑罰は死である、あゝ罪の恐ろしさよ、此罪を意識してかせずにか、多くの人は依然として罪の世界より一歩も出樣とはせない、其悟らざるの甚だしきに驚く。されど義の僕となりたる者は神よりの賜物として受くべきはキリスト、イエスにありて受くる永遠の生命である此以上の賜物はあり得ない救はれたる者、キリストに在る者のみが享くる特權である。

此の例會を以て今學期の例會を終る事にし、來學期を期して更に外に活動すべく種々抱負を祈り合つて散會す。

大阪學生キリスト教青年會聯盟——六月二十一日午後二時より大阪帝國大學醫學部講堂に於て、大阪學生キリスト教青年會聯盟主催の下に工學博士佐藤定吉氏を聘して大講演會を開催した、京都帝大、神戸商大及大阪各學校青年會より代表者出席し大阪學生福音傳道の爲獅子吼した、本學より宮地、溝淵、尾崎の三名出席溝淵君が講演の任に當つた。—宮地君報—

國際聯盟關大支部

學內研究會——六月一日(月)第三回研究會あり。クラブハウスに於て「中國治外法權撤廢問題」と題して西川君の研究發表あり。終了後臨時委員會を開催す。

決議事項

一、常務員の追加

二、會計係の交代

三、夏期休暇中の事業の件　(保留)

學內研究會　六月八日(月)第四回研究會を本館會議室にて開催、

a. The cause of Peace demands the Entrance of U.S.A. into the League of Nations

b. Resolved, that Imperialism is a Menace

aを中山君を　bを池本君の發表あり

國聯關西聯合會委員會の項要——第二回關西聯合會委員會は去る十四日京都帝國大學にて當番校京大同大大阪外語、關西學院、和歌山高商、本學の六校參加の下に開催された、司會者側より一場の挨拶あり堂々の經過概要は次の如し。

一、報告(當番校)

1 六月中旬開催の豫定なりし同大に於ける講演會中止の件

2 和歌山に於ける委員會無期延期の件

3 聯合會補助金削減の件

二、議　事

事業施行の日劃及場所決定

1 九　月下旬	委員會研究會		大阪外語
2 十一月上旬	仝		和歌山高商
3 十一月下旬	大事業		關西學院
4 一　月上旬	委員會		關西大學

尙次回九月大阪外語に於ける研究會の議題は今回通り。

1 The cause of Peace demands the Entrance of U.S.A. into the League of Nations.

2 Resolved, that Imperialism is a Menace.

である。

學內研究會——六月十五日(月)午後三時より部室に於て研究會開催し出欠をつけた後、昨十四日京大に於ける聯合會の顚末を述べて散會した。

臨時部員總會——六月二十二日(月)放課後よりクラブハウスに於て臨時部員總會を開催す、司會者遠藤君より一場の挨拶ありて夏期休暇中の事業に關して決議す。

一、論文提出の件

題　目「國際問題ならびに自由」

形　式　本部の懸賞論文に準ず

締切期日　九年廿一日限り

其の他、本部の懸賞論文題目

1 國家主義と國際主義

2 國際經濟に於ける日本の地位

3 國際精神とは何ぞや、を研究する事

二、キャンピングの件

部員相互の親和を測る爲に淡路島屈指の洲本方面に於てキャンプを募り折をみては講演會を開いて當地方の居住民に國際聯盟精神を植えつけんとプランが出來た。

期日は七月十七八日より三日間の豫定。

實行委員として廣田、西村、中山、近藤、遠藤、幸田の六君が擧げられた

三、第二學期部員總會の件

九月に開くべき部員總會は二十一日(日曜日)と決定した。

當日の出席者は十四名であつた。

馬術部　(千里山)

六月廿七日(土曜日)

騎兵隊にて障碍練習中人馬轉倒にて中村選手負傷す

六月廿八日(日曜日)

騎兵隊にて馬術大會あり

一、卷乘競技第二等　　住釜義貞

次で第二回三都學生對抗競技、關東關西聯盟對抗競技あり、本學より大谷(關西聯盟主將)田中、小寺、北の四選手出場(中村選手は負傷の爲棄權)

三都對抗競技には第一位、東西對抗競技には優勝し大優勝旗は大谷、田中兩選手に授與された。

七月二日(木曜日)
中村選手退院
七月廿二日(水曜日)
午前十時より正午まで、本部に集合し、合宿の打合せをなす。
七月廿三日(木曜日)
午後五時より鳴尾まで馬輸送をなす、所要時間三時間半
合宿所を田中旅館別館にとる、廐舍は鳴尾麓山氏新廐舍。
七月廿四日(金曜日)
合宿はじまる、都合により廐舍を安川廐舍に變更
七月廿六日(日曜日)
先輩小野田、西兩氏及千里山騎士會鹿山氏合宿所を訪ふ、大雨降つて水馬不可能
七月廿七日(月曜日)
田中君日本學生選手權大會出場の爲東上先輩樋口氏合宿所を訪ふ、水馬演習を行ふ
七月廿八日(火曜日)
北君日本學生選手權大會出場の爲東上田邊部長來廐晩餐を共にす
七月廿九日(水曜日)
習志野騎兵學校にて日本學生選手權大會選選練習あり
七月卅日(木曜日)
合宿あと一日にて終るので、夜神戸杏香樓にて親睦會を催す
習志野騎兵學校にて日本學生選手權大會最後の選選を行ふ。北、田中選手難なくパス、優勝確實の大谷選手は家事の爲急遽歸國。
選手權大會——決勝
田中選手　障碍一個を逃避した爲十三位
北　選手　障碍三個を落下第十五位
(備考—兩選手共、關西、京都方面よりの出場者中にて最高位であつた)
七月卅一日(金曜日)
合宿終了、鳴尾より千里山まで馬輸送を行ふ。
—記錄係報—

俳句會

夏の暑はけし飛んで秋の樣な涼しい七月の此頃例年にない氣味惡い季節である。雨は降り續く梅雨はとつくに去つたのに雨は止まぬ。こうした季節も俳人には絶好の俳材である。休暇に入る前學友の俳人に句を募集した所多忙にも不拘次の樣な顏振であつた。投句俳人諸兄に對し厚く御感謝致す次第です。

俳　句

目覺むれば茂色濃し夕日映ゆ　板垣勇二郎
初夏の月は暈きて犬と行く　望月久彌
雲散りし彼の峯よりの風涼し　中山謙一
村の山高見家あり夏木立　金子　斌
山の道茂みの露に足濡れぬ　平井三朗
肩輕くうちし友も亦夕涼み　廣田誠男
雨あとの星すみ渡り蛙かな
蘆の洲に遊船の艫おしにけり
汗に濡れて登るや豐公廟　杉本信雄
夏帽子振つて別れを惜みけり　飯田正一
晝休み雜誌片手の茂みかな　新町德之
古寺や奥の茂みにもの動く

(中山寺奥の院)
夏木立いよ〳〵古き御堂かな
鶯の亂れ鳴くなり夏木立
松葉牡丹の乏しき花や石疊
爽竹桃厠あらはに覗かるゝ
ペン採つて答案をみる暑かな
山寺の執金剛や夏木立

(金子君報)

天六新聞部(專門部第一部)

本學專門部一部學友會內に新聞部の新に創設された事は既報の如くであるが、去六月三日盛況裡に創立大會を開催して以來、上村部長をはじめ委員部員等鋭意協力一致しその內容の充實につとめ益々全部の發展を期して來た。而て茲に第二學期授業開始を機に晝間部、新聞部創立以來八月末日迄に於ける約半ケ年間の活躍

振りを左に簡單に紹介し、以て諸賢の絶大なる御援助を乞ふ。

一學期事業概略

六月三日(水)　創立大會開催（學報第九十一號三十八頁參照）。

六月十七日(水)　第一回社會見學として、大阪毎日新聞社見學擧行、四十七名參加。

六月廿六日(金)　山岳部の諒解を得て學生課の許可を乞ひ三階に事務室開設す。

六月廿七日(土)　第二回社會見學として、大日本麥酒株式會社吹田工場の見學を行ひ生ビールの接待を受く。十七名參加。

七月一日(水)　懸賞募集豫選入選圖案の人氣投票を行ひ部員章を制定し直に寶弘堂に製作方を命ず。

七月九日(金)　部員章納品さる。

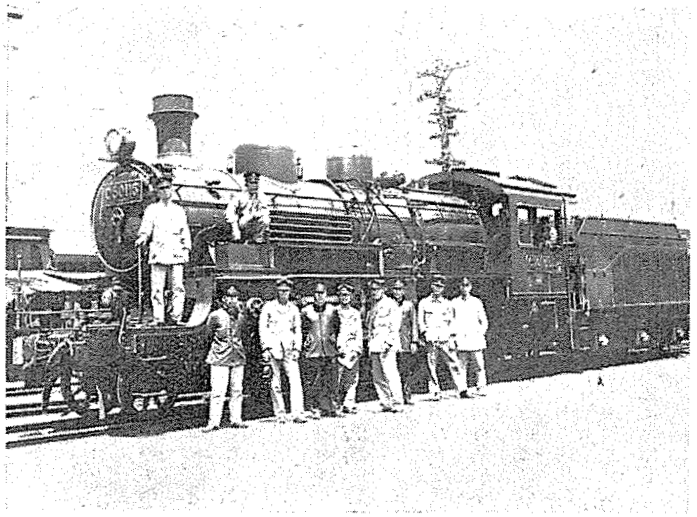
—新聞部夏季休暇事業—

速記講習會開催——「速記は新聞記者生活に、又學生々活に密接な關係を持つ」——と云ふ見解の下に在阪部員中有志九名を集め、七月廿日より仝月末迄隔日に開催し技術の向上に努む。

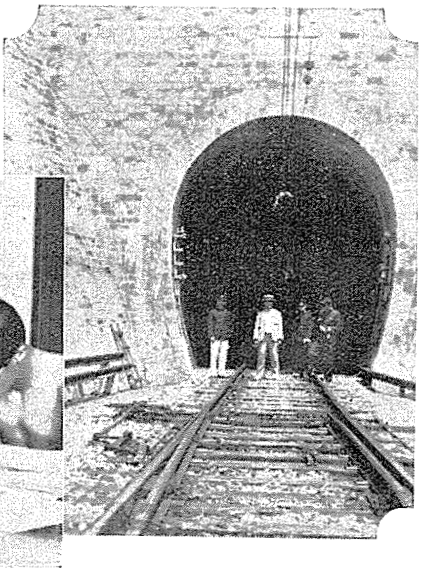
凉熱探訪擧行——八月一日より仝八日迄速記講習受講部員九名を凉、熱、二班に分ち左記の如くセンセーショナルな對社會的催を特別事業として開催し各位の絶大なる聲援、支持の下に盛況裡に終了す。

天六新聞部グラフ

上掲カットは部員章（上村永康案）
墨純銀・金浮彫りにて關西大學と校名を挿入す



(上)熱班の記念撮影——湊町機關庫を探訪して機關車に乗同の上奈良湊町間を往復す（前列左端山家助役デッキに立てるは當日附添の山本手）



(左)凉班の記念撮影　電鐵界日本一の參急青山トンネルを最初に徒歩で通りぬける

後訪探地各熱凉(下)
部一の記生學班各の中筆執事記てて室務事階三

涼班メンバー

記者　法科　豊田稔

〃　商科　古市堯

〃　〃　松田德二郎

〃　經濟科　奥田正雄

寫眞班　商科　橋本好三

—探訪地—○日本冷藏株式會社○木津川エアーポート○築港納涼遊船○參急電鐵青山トンネル○伊勢神宮參拜○二見浦○津貴崎海水浴場○其他三ヶ所

熱班メンバー

記者　法科　上村永康

〃　〃　中谷俊明

〃　〃　岩木秀雄

寫眞班　商科　松井正一

—探訪地—○釜崎スラム○デパート巡り○湊町機關庫（機關車に同乘し湊町奈良を往復す）○西田硝子工場○藤永田造船所○其他三ヶ所

附記

右の探訪により蒐集したる記事は八月廿二日より夕刊大阪紙上に連載す。

今回の企てに對してはいづれも充分その主旨を諒解され大なる援助と便宜を與へられたが、特に大阪鐵道局、湊町機關庫、大軌參急兩電鐵の厚意は大である。

次に我新聞部内、技術部寫眞班の活躍によつて得たるもの、或は記念の爲特に撮影せしめたるものゝ代表的寫眞を選出し「新聞部グラフ」と名づけ、我新聞部の華かなる歴史の一頁をより華かに綴つてゆかう。

天六經濟會創立に就て

久しく待望せられてゐた天六經濟會なるものが學校當局と數ケ月の長き日子と數回の接衝とによつて漸く去る七月九日認可を得創立の運びに至りましたことは誠に欣快に堪へない次第であります。

今や世界經濟恐慌の深刻なる影響とマルキシズムの普遍化は一部學徒の誤れる解釋により其の思想に動搖を來たさしめ稍ともすれば共産主義者の巧妙なる宣傳と煽動とに迷はされんとしつゝあるの感があります。これは全く指導機關の不充分に起因する獨斷的感傷的なる認識不足の缺陷に基くものと信じます。苟も身大學の學園に在る以上飽くまでも反省的であり理性的でなければなりません。内に省み外に愼み共に學の研鑽德の成就に協力して和合一致の學風發揚に盡瘁してこそ其處に私共の生命があり本分があると同時に彼等迷路に漂泊ふ學徒に對する一大羅針盤たり得るものと信じて疑ひません。

之れ即ち私達が本大學仁保學長並に武田主事に御願ひしまして適當なる指導者の下に最も眞劍なる態度と愼重なる認識批判を以て經濟學に關する一般學理を究明せんとして本天六經濟會なるものゝ創立を企圖した所以であります。

昭和六年度高等試驗問題

司法科

▼憲法

一、刑罰制度に關する憲法上の原則を論ず

二、帝國議會の豫算協賛權の限界を論ず

▼民法

一、時効の利益の抛棄を說明すべし

二、連帶の免除を證明すべし

▼論理學

一、法律學に於ける人格の概念と倫理學に於ける人格の概念とを比較論述せよ

二、カントの宣言命法（無上命法）を記し之を說明せよ

▼商法

一、荷爲替に付說明すべし

二、支配人取締役及び船長の權限の差異を說明すべし

▼刑法

一、故意と過失との區別を問ふ

二、人を殺害して所持金を强奪したる者の責任如何

▼心理學

一、注意の現象を論述せよ

二、性格の型を說述せよ

未だ認可されたばかりの處で詳細なる會則も會員も決定してはゐませんが大體右の樣な主旨を以て萬事岩崎先生の御指導により會則を制定し會員を募りたいと考へ茲に本會の創立を御報らせする次第であります。

賢明なる同志諸君！

願くは絶大なる御援助と深甚なる御共鳴とを垂れ賜はんことを切望して止みません。

—天六經濟會創立委員—

柔道部（專門部）滿洲遠征の途次七月十八日門司港に於て大阪商船らるる丸船上の記念撮影

前列右より　高橋務事長、黒田久氏、監督　大阪商船門司支店　校友會門司支部幹事　堀元嘉、牛治氏、後列右は　黒田繁四段

柔道部（專門部）

愈々我等の活躍すべき時は來た、幾年かの間敗北の涙に暮れつゝも嘗て先輩諸兄の飾つてくれた榮譽ある歴史を憶ひ復讐の血に燃え雨の降る日風の夜も或は學校に於て或は他の町道場に於て猛練習を續けて來た、蒔いた種が芽生えて來たのである。我が部は角谷主將村上、曾根等三、四の先輩を送り出したとは云へ關西に於ける第一人者として天覽御前試合に活躍せられ其の名を天下に誇る嚴父の如く慈母の如き親切なる黒田教師を上に仰ぎ、技倆に於て人格に於て學問に於て名實共に名主將たるの貫錄を備へたるグレートキャップテン鵜原三段を初め、從來からの闘將として聞ゆる宮原佐々木大西の諸君、之れに新進氣鋭の新入選手を迎へ全く其の陣容成り、且つ一部二部との合併に依つて一層其の基礎を強固にし去る尼崎警察との對抗試合をトップに一九三一年の戰の幕を切つたのである。

六對零で尼崎警察を破り其の後度々の個人試合に優秀選手を派して我が關西大學柔道部の名を世に知らしめ一躍闘大の柔道部として斯界に其の名を恐れられる樣になつた。

此の歴史ある柔道部は高專聯盟、典武大會を眼前に控へ對中津署の試合をテストに優勝に邁進しつゝある

▼刑事訴訟法

一、自由心證主義を説明すべし

二、告訴の拋棄及取消を論ずべし

▼民事訴訟法

一、訴訟參加を説明すべし

二、訴の取下を説明すべし

▼國　史

一、奈良朝時代に於ける藤原氏の活動

二、德川幕府の司法制度

▼國際私法

一、外國法適用の制限を論ぜよ

二、法律行爲の成立の準據法を述べよ

▼國際公法

一、外國軍艦の享有する特權を説明すべし

二、海上捕獲を説明すべし

▼國文及漢文

一、萬葉集の歌に現はれたる主なる精神に就て述べよ

二、治大國若烹小鮮の意義を評釋せよ

▼行　政　法

一、行政處分の附款（附帶規定）を説明すべし

二、造營物の概念を論述すべし

我々は優勝の自信を以て我が關西大學柔道部の名を世に輝かすべく死力を盡して戰ふ覺悟である。

黄金時代を現出せる我が柔道部は宿望たる優勝の榮冠を獲得すると共に遠く滿鮮の地に武裝し一歩を踏み出して鋒を交へんとしてゐる。

腕は鳴り血潮は高鳴る、優勝を期して部員一同意氣頗る乾昂。一九三一年五月記。

山岳部（專門部第二部）

夏山の事業を終へて——我が山岳部の事業の一つたる夏期特別計畫も部員並びに山岳愛好の學生大衆の支持後援により遂行するを得た。

本年度の山岳部は公認されたものゝ、學友會の豫算が無かつた關係と、經濟的の理由に基き、北アプスの雪を踏む事を得なかつた事は、殘念でありましたが殘餘の事業の一つ一つに對して、貴重なる經驗と、各パーテイの自覺的意思行動通化の實を擧げ得ましたるは、誠に喜ぶ可き現象であります。思ふに我が山岳部今夏に於ける大なる收獲と謂はねばなりません。

大山山麓のハイク、大峯踏破、南海浩線助松海岸の勤勞キャンプ——これ我が山岳部が氣分本意な山岳趣味を目的とする觀光團體と、大いに其の面目を異にする所以のものです。

夏山の事業完了に際しまして、山岳部の綱領「大自然ノ道場ニ於テ完璧ナル人格ヲ陶冶スルヲ其ノ理想トシ强健ナル體力ノ養成ト高級ナル山岳知識ノ普及化ヲハカルヲ其ノ目的トス」なる記標の下に我が部の開拓と益々天下に其の生存權を認められん事を期して止みません。

行事の一班——○笠置ピクニツク　期日七月十六日　參加者角谷、山田、森田、宮本、コース—大軌前（午前八、三〇）—奈良大佛殿（前九、〇〇）—佐保川—月瀬街道—中之河—九頭神社（午後零時）笠置山麓—全中腹（後三、〇〇）驟雨に含ふ、雨の中を頂上まで—山麓—笠置驛（後四、〇〇）—奈良驛（途中下車）—大阪天王寺驛（後八、〇〇）行程廿五粁。

○助松海岸　勤勞キャンプ（南海浩線）目下開設中、期間八月十九日—八月廿七日

參加者角谷、山本、油野、俵谷、元木（廿三日現在）

—豫　報—

九月中旬より芦屋ロツクガーデンに於て、壯快なるロツククライミングの練習をなす。奮つて參加あらん事を希望します。日程は追て發表致します。

—（角谷君報）—

辯論部（專門部第二部）

岐阜大垣兩市に於ける夏季遊説

海に山に高らかに謳ふ若人の夏である。正義の念を胸底に燃やし、言論の威を振ふべく夏季遊説の行を西濃美方面にとつた。

七月廿一日午後學友諸君の見送りを受けて大阪驛發、明くれば八月一日ここ大垣市商工會議所大講堂に於て遊説の第一聲を擧ぐる日である。

同地の新聞紙上には、吾等が行を報じてあり街頭演説に將又ビラ撒布に活躍して實傳に遺憾なき

▽經　濟　學

一、商品の價格は何に因つて如何に決定せらるゝか

二、景氣循環論を説明せよ

▽社　會　學

一、分業による連帶を説明すべし

二、大家族（家長的家族）と小家族（近代的家族）との異同を述べよ

▽破　産　法

一、破産債權と財團債權との異同を説明すべし

二、否認權を説明すべし

▽刑　事　政　策

一、保安處分を説明すべし

二、囚人自治制を説明すべし

▽社　會　政　策

一、社會正義の觀念を論ぜよ

二、私有財産制度を批判せよ

▽哲　學　概　論

一、ヘーゲル哲學に於ける客觀的精神とは何ぞや

二、實證主義に就て論評せよ

▽論　理　學

一、存在判斷とは何ぞや

二、事實認識の根據を論ぜよ

以　上

を期する。

定刻七時と云ふにひしひしとつめかけたる聽衆は同市隨一の大會堂を白衣を以て埋めた。集ふ大衆の熱誠に應ふべくプログラムに從つて堂堂の論陣を張り、何れも練りに練つた論旨を洗練されたる舌端に振ふ。はちきれんばかりの緊張せる會場の空氣は壇上の人と壇下の人を一體となし、感激の迸るところ急霰の如き拍子は堂をゆるやがす、樟尾を飾る武田教授の「時代立法について」の講演の後、聽衆に對して挨拶を述べ、ここに大會を閉ぢた。

翌二日岐阜市に向ふ。いよいよ本舞臺と云ふ氣が漲り、昨夜の非常な盛況に一行の意氣は益々昇り、ここに有終の美を收めんと、白帝の猛威ものかはと午後三時自動車に旗幟を押し立て街頭演說とビラの撒布に奮迅する。此の日、更に岩崎教授を迎ふ。

ここ岐阜は板垣伯が自由を絶叫して鮮血を流したるところ、言論に理解をもつ市民は夏の日の未だ暮れやらぬに早くも開會を待つもの無慮六百に上る。

新築美美しく成れる公會堂、吾吾の叫ぶところは一語一語聽衆の耳朶に徹して嵐の如き拍手を捲き起す。

岩崎教授　重厚なる姿を壇上に現はし、深き蘊蓄を傾け、莊重なる論調を以て「輝ける墓標」を語れば滿場寂として聲なく、ただ感銘に醉へるものの如くである。

斯くて十時半市民と共に萬歲を三唱し、盛んなりし大會の幕を閉ぢた。

寸暇を割いて吾等と行を共にせられたる、武田、岩崎兩教授並に木戸教務主任に對し感謝するとともに、名古屋新聞社に在る校友冨田氏をはじめ同地の校友先輩諸賢の御盡力に謝意を表したい。

辯論部遊說記念撮影（岐阜市にて）

プログラム

司會者　宮本新太郎

一、開會の辭　山田一眞
一、混亂せる世相を見つめて　大石潮光
一、激動のわが滿蒙よ！　教授　武田藏之助氏
一、時代立法について　講演直政
一、若し現代にキリスト來りなば　鳥巢隆三
一、現代社會問題批判　辯論部長　宮本新太郎
一、憐める社會の行方　教授　久保田健一
一、產兒制限問題に對する一考察　教授　岩崎卯一氏
一、輝ける墓標　猪谷當一
一、經濟の變動と法制の推移
一、閉會の辭

（猪谷君報）

編輯部よりお斷り――吉田一枝教授の「日本憲法の成立過程を論ず」の續稿は都合上本號は休載し次號より連載いたしますから御諒承を願ひます。なほ部報中「射擊部の九州遠征記」は原稿締切後にて紙面の都合がつきかねますので次號廻しといたしました。

表紙及扉寫眞について――本號には中村良之助氏所藏の「歐米の大學」の外に、醫學博士小關光尙氏の好意により表紙及扉を飾ることが出來ました「古城風景」は以後連載いたします

正井教授著「貨幣と爲替」を讀む

森川太郎

本學教授正井敬次氏は這般『貨幣と爲替』なる一書を公刊せられた。同書の我學園を背景とする學問的意義に就きては、前號に岩崎教授が麗筆を以てものせられたから、更に贅言を用ふるの必要はない。唯其內容に至つては關說せらるるところ少かりしと考へらるゝに依り、左に其大要を述べんとする。蓋し同學後進の拙き試みとして、幸ひ兩教授の諒恕を得るを得んか。

一

本書題して『貨幣と爲替』と謂ふ。蓋し貨幣、金融に關する數多き文獻の中に極めて例し少き標題の一である。而も教授が過去の通例に反き敢へて貨幣と爲替とを一書の題目に選べるには、固より相當の理由あるに依つてゞなければならぬ。教授は謂ふ、『……私は、貨幣理論の研究者は、實際取引上貨幣が如何に取扱はるゝやの點に就て、外國爲替の市場を顧みる必要があり、又外國爲替市場を研究せんとする者は、爲替市場に於ける取引の目的物亦にそれの相場に關する根本的の知識を得る上に於て、彼の研究を貨幣の一般的理論にまで遡らしめるの必要があると考ふる者である』(序第二頁)と。即ち通說に從ひ爲替相場を以て一國貨幣の對外價値(Aussenwert)の具體的表現と見る限り、對外爲替の問題は、貨幣の對內價値(Binnenwert)即ち貨幣の購買力の問題と相表裏して貨幣の理論中に取り入れられねばならぬ。斯くて『元々、外國爲替論は貨幣理論の一部をなすものであること、及び貨幣制度の實際は外國爲替の實際に密接なる關係を有することに想到するときは、本書に於ける二箇の編は必ずしも二箇の部分を意味するものではないことが知り得られる』(序、第一頁)のである。

以上の如き見解より教授は本書を二編に分ちて第一編「貨幣の理論と貨幣制度」、第二編「外國爲替の理論と實際」となす。更に第一編を分ちて第一章 貨幣の本質、第二章「貨幣の價値」、第三章「貨幣制度」の三章となし、第二編を區分して第四章「外國爲替の理論」及び第五章「外國爲替の市場」の二章となす。是に依つて觀れば、第一章は貨幣の本質を、第二章は貨幣の對內價値を、第四章は主として貨幣の對外價値を夫々取扱へる理論的部分であり、第三章及び第五章は貨幣制度並びに外國爲替市場の實際を叙述せる記述的部分である。即ち貨幣論の主要問題に對して、理論に配するに實際的記述を以てし、而も之を一貫せる教授の主張に體系づけたる恰好の貨幣論的著作である。題名が或ひは誤りて感ぜしめ易き貨幣と爲替に對する個別的論述の合纂では斷じてない。

本書に於て教授が特に力を注ぎたるは其理論的部分にありと思はれる。又實際的記述は學徒の著作に個性を與ふること比較的僅少であらう。故に茲では其理論的部分の大要を、筆者の讀み取り得たる範圍內に於て再現し、以て教授の叱正を乞はんと欲する。先づ第一章を中心に教授の貨幣論を述べ、次に第二章に依て其貨幣價値(對內價値)論を叙し、最後に第四章に基きて貨幣の對外價値論を見るであらう。

二

先づ貨幣とは何であるか、教授は答へて謂ふ、『私に於ける貨幣の概念は如何にして最も簡單に言ひ表はされ得るやと云ふに、其は貨幣とは交換經濟の社會に於ける「一般的可交換性(Allgemeine Tauschbarkeit)の保持者」であると云ふを以て盡されると考へる。』(第二頁)謂ふ所の意味は貨幣が屢稱へられるが如く交換の媒介者又は交換手段にあらずして、それ自身一の交

換對象なることである。蓋し貨幣經濟の內部に於て行はるゝ壹と買とは一の間接交換を構成する二過程にはあらず二個の獨立なる交換（相手の一方が常に貨幣なるところの）である。今や間接交換なる概念は斥けられねばならぬ。何となれば『貨幣なるものは、歷史的に見るも又今日の制度の上より見るも、其は單なる交換の用具ではなく、富の蓄積に對する一方便としての所有の客體であると見らるゝことが正しい』（第五頁）と考へらるゝからである。然らば斯く考へられたる貨幣の實體は何であらうか、教授は貨幣の實體を金銀の如き金屬に限る金屬說と、貨幣を以て有體物と見ず圓又は弗と云ふが如き抽象的計算單位と見る抽象學說とを排し、貨幣の實體は必しも金銀たるを要せず、其は紙片であれ布片であれ、兎に角それが貨幣たることを表識するものであれば可なり、となす所謂非金屬論者に加擔する（第五——一一頁）。但し貨幣の實體に就きては『一般的可交換性の保持者たる貨幣は、一の國民經濟に於て如何なる人に對しても如何なる物に關しても通用し得る所の、具象的の物たることを要すると解釋するが故に、當座預金そのものは元より當座預金小切手と雖もそれは貨幣ではないと見る』（第一一——二頁）。斯くて貨幣は具象的存在たる交換對象又は所有の客體として一の財である。

今日貨幣本質論に於ては、粗雜に云つて、貨幣商品說（Warengeldtheorie）と指圖證說（Anweisungstheorie）の二主流か對立してゐる。されば教授は貨幣を一の財と見ることに依つて貨幣商品說（教授の所謂貨幣財貨說）論者たる自らの立場を明かにする。『不幸にして私は、今日に於て最も有力である所の貨幣の本質に關する指圖證說を信ずることが出來ない。從つて私は、貨幣論の體系を指圖證說とは反對の基礎に於て建立せんとする所の、數少き論者の側に私自身の立場を發見するの結果となつた』（序第三——四頁）。

しかし貨幣が一の財貨なる論據は今少しく精細に吟味せらるゝを要する。何となれば貨幣が財貨なりや否やの問題は『貨幣價値決定の問題に對して前提をなすものである。卽ち貨幣に就て財貨說を取る者は、貨幣の價値を一般物の價値と同一の性質と見て、貨幣價値の變動又は決定に關する說明を一般的の價値法則に基きて之を行はんとする。之に反して貨幣財貨說に反對するものは、貨幣に就て特殊の價値法則を發見せんとして種々の努力を試みる』（第三三頁）ものなるが故である。而してこれが爲には豫め何が財貨（經濟財）なりやの問題が決せられねばならぬ。思ふに經濟財とは効用又は有用性（換言すれば可交換性）と稀少性とを有する所の物である。（第三六——七頁）然りとすれば第一に『貨幣を以て社會經濟上の意味に於ける効用又は有用性を有する物と看做し得ること甚だ容易である』（第三七頁）。尤も貨幣は一般の消費財の如く人の欲望に對して直接に役立つことはないであらうが、それの經濟的職能（教授は貨幣の職能を分ちて、一般的流通手段、價格表示手段、資本表現手段の三となす、第十二——二四頁）より自ら特殊の効用を得來るものである。第二に『貨幣の造出が國家又は特殊の機關に依つてのみ行はるゝと云ふ貨幣制度の下に於ては、貨幣に對してはそれを稀少ならしめる所の社會的の條件が存在するものと見られ得る。從つて斯の如き制度の下に於ては、貨幣は稀少性を有する所のものであると云ふことが出來る』（第三七——八頁）。卽ち貨幣は社會經濟上の意味に於ける有用性と稀少性とを共に有す。從つて貨幣は經濟財に外ならぬものであり、それの價値は一般的經濟の價値と同一の根本法則に基きて論じ得られる。斯くて教授は貨幣の本質に關して論議紛々たる諸學說を巧みに紹介、批判（第二四——三二頁）したる後、遂に自ら C. Menger, L. Mises, K. Helfferich の流れに浴ひて、『私は職能價値學說に基く所の貨幣財貨說に從はんとするものである』（第三二頁）との主張をなすに至るのである。

次に然らば貨幣は一般經濟財の種類分けに於て如何なる地位に立つものであらうか。素と經濟財を、人の欲望充足に直接に役立つものと、間接に役立つものとの二種類に分ち、前者を消費財（初序次の財）と云ひ後者を生產財（高序次の財）と稱することは、C. Menger 次來オーストリア學派の傳統的區別であり、此區別に

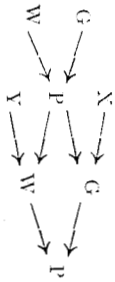
從ひ Böhm-Bawerk, Halfferich 等は貨幣を以て一種の生産財と看做さんとした。『然るに財の種類を豫め消費財と生産財との二種に限定し然る上貨幣を其何れに屬せしめんやを議するが如きは二個の椅子に三人の客を請ぜんとするが如き不都合を犯すものとしか考へられない』(第四一頁)。故に『私は貨幣を以て生産財及び消費財以外の特殊の財と見ることが適當であると考へる』(第四〇頁)。『蓋し私見によれば貨幣經濟の下に於ける經濟財は、其財なるの條件を、主として自然の力に受くるものと、人の生産力に受くるものと、社會的の組織に基きて之を得るものと三種に分たれるのであるが』、貨幣は財たるの條件を社會的の組織に受くる第三の財であつて、即ち『一般的可交換性の一般的承認と云ふことに依つて、貨幣經濟の社會に於て創始的に發生せる經濟財の一種である』(第四一、四二頁)。云はゞ『貨幣經濟の客席には、物々交換經濟に於ては見られざる所の新しき賓客が現れる。其は即ち貨幣である元より貨幣は他の客とは列を同じくせざるものである即ち彼は常に他の客に相ひ對して立つものである、併しながら其は唯列を同じくせざるのみであつて、席を同じくせざるものではない。謂ふ所は即ち、貨幣は他の財貨に對することを其任務とするものであるが、併しそれが爲めに貨幣は財貨ではないとは言ひ得ないと云ふことを意味する』(第四一頁)。尙『此別種の財を如何なる名稱を以て呼ぶを適當とするやに就ては、私は之を交換財又は交換手段(Knies, Mises 等の稱ふる如く)と言ふよりは寧ろ流通手段財となすことがよいと考へる』(第四五頁)。

三

進んで貨幣の價値を見る。貨幣價値の意義は學者に依つて種々に解釋せらるゝが、其見方は大體に於て二種に分たれ得る。第一、貨幣價値を以て貨幣の購買力となし、即ち貨幣價値とは物價の逆價値又は物價指數の逆數であると說明するところの非財貨說論者の見解及び第二、貨幣價値の語を以て商品の價値と同一の意味に於ける貨幣の價値を意味せしめ、貨幣に其固有價値を認めんとする財貨說論者の見解即ちこれである。然るに貨幣價値を以て物價の逆價値と見る考へ方は、最も一般的に行はるゝ所なりとは云へ、斯く見る時は貨幣價値は其輪廓判然たるを得ず、而も理論的にも Robertson の指摘せる如き誤謬(第四八頁)を含む。教授は貨幣財貨說論者として固より第二の見解をとる從つて貨幣價値にも限界効用理論を應用せんとする Mises 等の立場には、根本的には一致するも尙從來の論者に至つては財貨說に基く貨幣價値理論が充分に發展せしめられざるを遺憾とする(第四五——五三頁)。

茲に於てか教授獨自の貨幣價値理論が展開せられねばならぬ。曰く『私は貨幣價値の意義を解して、それは價格構成の一因素としての貨幣に對する社會評價の大さであり、同時に又それは一般的交換對象としての貨幣の交換能力の大さであると言はんとする。而して更に附言して私は、右の如き貨幣の能力は既に交換割合として現はれたる量ではなくして、其は未だ貨幣に於て藏せられたる力である、と云ふ』(第五四頁)。茲に注意せらるべき要點は、教授の謂ふ貨幣價値が貨幣の固有價値たること及び其價値が社會的主觀價値の意なることである。故に『其は兩種の職能(流通手段、資本表現手段)に於ける貨幣に就て共通に認めらるゝ所の價値である。蓋し流通手段即ち購買手段としての貨幣の價値は、結局に於て價格となつて現はれ、資本表現手段たる貨幣の價値は、結局金利として示さるゝものなることを否定し得ない』(第五六頁)。『從つて斯くの如き貨幣の價値は、價格に對しても又金利に對しても、同樣の支配力を有する所の價値であると見られ得る』(第五七頁)。

尙教授に於ける貨幣價値の意義を明かならしめんが爲めに、貨幣價値と價格との關係を圖に依つて示せば次の如くである。



即ち『今貨幣の價値をGとし貨物の價値をWとし價

格をPとする。而して今日の貨幣價値は昨日の價格と價格以外の要素とに基きて構成せらるゝものと見て、斯の如き價格以外の要素をXとする。又今日の貨物價値の構成に關する昨日の價格以外の要素をYとする然るとき、G、W、P、並びにX、Yの間の關係は前圖の如くである』(第五七頁)。

而して教授の斯くの如き見解に對しては恐らく二箇の批難が加へられるであらう。一は即ち斯かる貨幣價値の概念は一般的の觀念に反すと云ふ點であり、他は貨幣價値を斯く觀念することに何の實益ありやと云ふ點でなる。しかし一歩退いて考ふれば(一)貨幣價値を以て物價の逆と見ることこそ却つて經濟生活上の實際觀念と一致せず、(二)これに依つて貨幣價値政策を物價政策の一面として正當に評價し得る實益を有し得る所以を知るのである(第五八——六三頁)。

次に斯く解せられたる貨幣價値は如何にして決定せらるゝか。教授は非財貨説に屬する數量説、所得説並びに貸借均衡説、購入餘力説、利子説及び財貨説に從ふ古典學派數量説、生産費説、需要供給説並びに限界効用説の貨幣價値決定理論を詳細に論評(第六三——九九頁)したる後、徐ろに自家の見を開示する。

先づ前提として問題は貨幣の絶對的價値量に關するにあらざることが注意せられなければならぬ。蓋し貨幣價値の絶對的大きさが如何にして定まりたるかは結局歴史的にのみ説明せられ得る事柄なればである。故に問題は『時に從つて生ずる所の貨幣價値變化の割合を決定すること』(第一〇〇頁)である。又『元々主觀價値説を取る所の私に於ては、貨幣價値とは貨幣に對する經濟人の關心の大さであるとせられざるを得ない』(第一〇一頁)。而も『所謂社會的主觀價値としての貨幣價値は、一の數量的表現を持ち得るものと考へる』(第一〇二頁)。從來の財貨説に於ける缺點の一は此點に關し數量的説明を用ひ得ざることであつた(第九九頁)。

『さて私の説かんとする所の貨幣價値決定の方法は至極簡單である。即ち今Wを以て貨幣價値決定の方法は至極簡單である。即ち今Wを以て貨幣價値としKを以て一定時に於ける貨幣の存在量とし、Mを以て貨幣の流通數量とするときは、私によれば次の如き方程式が成立する。

$$W = \frac{K}{M}$$

而して右によつて私は、一定時に於ける貨幣價値は其際に於ける貨幣の存在量と貨幣の流通數量との間の關係によつて定まる、と云ふことを主張せんとする(尙一定時と云ふは事實上或一日と云ふことである)』(第一〇二頁)。

具體的云へば、Kは中央銀行の當座預金十兌換券發行高十兌換準備以外の鑄造貨幣、の合計であつて所謂購入餘力と稱せらるゝものに匹敵すべく、Mは或日に於ける總ての經濟主體の貨幣收入の總計である(社會一般に就て言へば貨幣支出の總計と云ふに等しい)。さればKの增大は(Mとの關係に於ける比較的の、以下これに準ず)Wの增大を意味する。蓋しKの增大は各經濟主體に於ける手許現金の增加即ち社會に於ける貨幣に對する一般的需要の增加を意味し、從つて貨幣價値を大ならしむる因素をなすが故である。反對にMの增大はWの減少を意味する。蓋しMの增大は社會に於ける貨幣流通數量の增加、即ち一般的貨幣供給の增加を意味し、從つて貨幣價値を小ならしむるが故である故にW、K、Mは前記の如き兩數關係の因子たるを得る(第一〇六——七頁)。

更に斯くして成立せる貨幣價値と、それとは別箇に成立せる貨幣價値とに於ける變化の割合が、夫々に新たなる價格の決定に關して要素をなすのであるが、貨幣價値論としては此點に於て問題を一般價格論の手に委ねなければならぬ(第一〇九頁)。

四

次いで外國爲替の理論に進む。此章下に於ては第二章に於ける貨幣價値(對內價値)との關聯に於て、所謂對外價値の具體的表現たる爲替相場の決定理論が重點をなす。但し順序とし外國爲替の意義より説き初むるを便とするであらう。

抑も『外國爲替とは現金たる時並びに國を異にする所の異種の貨幣(資金)の交換取引である』(第一六三

頁)。而して異種の貨幣とは『異りたる制度の下に於て造り出さるゝ所の貨幣を指して言ふものに外ならぬのである(茲に制度と云ふは、單に本位制度の意ではなく、廣き意味に於ける制度の意である)』(第一六一頁)。又外國爲替取引は一國と他國との間に行はるゝにあらずして、同一國内の輸出入商人と爲替銀行との間に行はるゝ取引である。即ち『外國爲替とは外國との間に爲替取引を行ふことであると解すべきではなくして外國資金に就て爲替取引をなすことであると見るべきである』(第一六四頁)。

さて『外國爲替とは内國資金と外國資金との交換取引である。從つて其交換に際しては、一般商品の賣買に於けるが如く、交換對象の双方に就て行はるゝ所の評價に基きて、其處に一種の交換割合即ち價格が發生する、斯の如き價格が即ち爲替相場である』(第一六五頁)此の價値は一般に貨幣の對外價値と呼ばれ、貨幣價値を以て物價の逆價値と見る論者にとつては、結局内國貨幣の購買力(内國に於ける)と外國貨幣の購買力(外國に於ける)との間の價値割合である。しかし『私見に依れば、爲替相場又は貨幣の爲替價値(Kurswert)なるものは、物價の逆數としての貨幣價値の相場ではなくして、物價の原因としての貨幣價値に關する相場であると考へる』(第一六七頁)。蓋し一般に稱へられる意味に於ける對外價値の如きは、寧ろ國内價格に對する國際價格の問題として説かるべきものなればである故に『爲替相場に於ける評價の對象は之を二種に區別することが理論上正當であると私は考へる。即ち一は第一次的に評價せらるゝ所の對象であつて、其は一般的なる貨幣價値である。他は第二次的に評價せらるゝものであつて、其は期限其他の條件を異にする所の各種の信用(爲替手形)の價値である』(第一六九頁)。尤も茲に第一次的又は第二次的と云ふは全然觀念的に云ふのであつて、決して時間的先後の關係を云ふのではない。されば『事實上の取引物たる爲替手形の相場は要するに其基本的なる貨幣價値の相場と云ふ身體に、各種の條件と云ふ異りたる衣服を着せしめたるものに過ぎない』(第一七二頁)。

以上は爲替相場に於ける評價の對象に就きて述べた次に然らば爲替相場は如何にして決定せらるゝか。此場合相場の絶對的大きさを説明することは一般價値の場合に於けるそれよりも頗る容易である。即ち一般價格の場合に於ては歴史的説明に依るの外はなかつたが爲替の場合に於ては相場の基準を一國の本位貨幣と他國の本位貨幣との間の法定平價に求むるを得る。但し此際兩國が共に同一の金屬、特に金を以て貨幣の本位とせことが前提せられねばならぬ。又爲替相場は右の如き基準を中心として上下に變動するものであるが、其變動は完全なる金本位國間に於ては所謂全輸送點の範圍内に制限せられ、一方又は双方が然らざる兩國間に於ては此種の制限が存しない(第一七二——九頁)。而して右何れの場合に於ても爲替相場が如何にして變動するかを説明せんとする學説に、(一)古來一般に稱へられ J. S. Mill, Goschen, Knapp, Bendixen, Elster 等一連の學者がこれに從ふところの國際貸借説(Bilanztheorie)又は需要供給説(爲替手形に關する)と、(二)大戰 Cassel の新に唱道せる購買力平價説(Kaufkraftparitätstheorie)との二があるが、教授は兩者共其説明に於て充分ならずとし(第一七九——九四頁)、教授獨自の見解を主張する。

曰く『私は爲替相場を決定する所の因素は、爲替市場に於て評價せらるゝ所の、關係兩國の貨幣價値であると考へる』(第一九四頁)。『元より爲替相場に於ける貨幣價値の評價は内外兩種の貨幣に於て行はれる。併しながら理論の説明は、貨幣に於て一方的の評價がなさるるものと見て之をなすを以て充分とする』(第一九五頁)。故に例へば我國の爲替相場に就きて見る時、『外國爲替手形に換へらるゝ所の我國の貨幣を評價するものとなすことが、爲替相場變動の理論を了解し易からしむる所以であると考へる』(同頁)。然るに爲替相場に於ける評價の對象には貨幣價値と資本價値の二があるる兩國貨幣價値の評價にのみ基きて成立するは基本的なる爲替相場であつて、具體的には電信爲替の相場である。此評價の上に更に資本價値(金利)の評價が加味せられて成立するのが電信爲替以外の各種の爲替相場であつて、委着拂相場、期限附手形等がこれに屬する

（第一九六頁）。

然らば教授の説と前記二説との關係如何と云ふに、第一に『私は國際貸借説に於ける外國爲替手形の需要供給は爲替市場に於ける貨幣價値變動の一原因であると考へる』（第一九七頁）。從つてこれは教授の説に包含せられ得る。第二に、教授の説は購買力平價説と兩立しない。何となれば教授にとつて『貨幣價値は爲替相場の直接の原因であり決定者である』（第一九八頁）。と同時に貨幣價値は物價に對しても原因をなすものであるが、而も貨幣價値は『爲替相場に對しては物價よりも前に爲替相場の決定者たる地位に立つべきが當然である』（同頁）。故に物價を以て爲替相場の決定者となす購買力平價説とは相容れない。『即ち私見は貨幣價値を以て物價と爲替相場との間隙を埋めんとするものであつて、其は要するに物價に於ける、爲替相場に對する因素性の存在を拒否せんとするものに他ならぬ』（第一九八――九頁）。

次に實際上爲替相場に變動を生ぜしむると想像せらるゝ要素を見るに、（一）商品の輸出入（invisible trade を含む――筆者註）、（二）國際的資本の輸出入、（三）金融政策（金利の上下、公債の賣出等）、（四）正貨の輸出入等が數へられる（第一九九――二〇一頁）。然るに國際貸借説は（一）、（二）の場合を説明するが（三）、（四）の原因による變動を説明し難い。又購買力平價説は爲替相場に關する直接の原因を説明するに足らぬ。蓋し商品並に資本、正貨の輸出入は、總て物價の變動に關係を有つ、併しながらそれ等の輸出入はそれ自體が物價の變動の意味するものではない。然るに爲替相場はそれ等の事實に伴つて變化する。是を以て見れば、物價と爲替相場との關係は間接的である。故に物價を以て爲替相場決定の因素となすことは誤である』（第二〇一――二頁）。

五

以上本書に於ける理論的部分の全體に亘つて其大要を概括し得たと信ずる。固より筆者の力足らずして教授の所論の眞意を傳ふるに誤なかりしやは保し難い。然れども筆者の解し得たる限りに於ては、教授は略オーストリア學派の流を汲んで、貨幣の財貨性を高調しこれに其の職能に基く固有價値を認むることに依つて貨幣理論の全體に一の統一ある體系を打ち建てんと試みたるが如くである。而して其企圖は本書に於て一應成し遂げられたと見てよいであらう。全體を通じて一貫せる推理の正確さと、恐らく前人未到の境地にまで發展せしめられたる貨幣財貨説理論の獨創性には唯敬服の外はない。唯筆者にして望蜀の數言が許さるべくんば二三の語義に就きて今少し詳細なる説明の願はしかりしことである。例へば社會的主觀價値の概念及び資本概念の如き。又教授は今日汎く行はるゝ指圖證説が、教授の説く如き財貨説と果して相容れざるものなりやに關しても若干の疑問が差挾まれ得ると考へらる尤もこれ等の諸點に關しては、本書に於ける行論の都合上、説くべくして及ばざりし論議の多くを教授は有せられるであらう。筆者の燥急なる質疑を咎めらるゝことなくんば幸ひである。

終りに本書の如き創見に富める勞作が本學を背景として公にせられたることに對しては衷心同慶に堪へない。著者正井教授に深き尊敬の意を表すると共に、小篇を草するに當つて或ひは誤つて冒せる非禮に對し教授の實恕を乞ふものである。――六・六・二四――

校友諸氏に

昭和七年度用校友會員名簿は來る十一月上旬發行の豫定であります御入用の方は名簿基金三圓を添へ御申込下さい。

なほ各位の現住所勤務先等に御移動がありますれば至急御一報願ひます。

昭和六年九月

關西大學學報局

織田萬 著 改訂增補行政法講義
下卷 大13……373/45/2

占部百太郎著 英國政治制度 昭3……300/9/

軍事

佐藤清勝 著 予が觀たる日露戰爭 昭6……396/26/

經濟，交通

Smith, A. 石川暎作譯 富國論
第一卷 明17……411/449/1
第二卷 明18……411/449/2
第三卷 明21……411/449/3

住田正一編 海事史料叢書
第十八卷 昭6……482/23/18

科學

林鶴一，小倉金之助共著 級數概論 昭3……610/10/

神門久太郎著 高等教育平面圖學 昭5……609/1/

加藤元一著 生理學
上卷 昭2……691/4/1
下卷 昭4……691/4/2

柴田寛外共著 高等教育數學
第一編 市原哲治，三角法附立体幾何學 昭5 610/9/1-1
別冊 對數表 三角函數表 昭5……610/9/1-2
第二編 大石喬一，代數學 昭4……610/9/2
第三編 田中保房，座標幾何學 昭5……610/9/3
第四編上 柴田寛，微分積分學上卷 昭4……610/9/4-1
同 下 同 同 下卷 昭5……610/9/4-2
別冊 總括表 昭5……610/9/4-3

田中芳雄，安藤一雄共著 最近化學工業試驗法
上卷 昭5……768/1/1
中卷 昭3……768/1/2
下卷 昭5……768/1/3

田中芳雄，喜多源逸共著 有機製造工業化學
上卷 昭5……768/2/1

美術

平凡社編 世界美術全集
別卷 第六卷 素描篇 昭6……803/2/6
別卷 第十三卷 庭園篇 昭6……803/2/13

文學

物集高見編 新註皇學叢書
第一卷 昭4……942/15/1
第二卷 昭6……942/15/2
第四卷 昭3……942/15/4
第七卷 昭3……942/15/7
第八卷 昭3……942/15/8
第十二卷 昭3……942/15/12

寄贈圖書

朝鮮總督府 同編
朝鮮總督府施政年報 昭4……404/4/9

中央融和事業協會 下地寛令著
融和問題の社會心理學的研究 昭6……510/48/

外務省文化事業部 同編
中華民國教育其他ノ施設概要 昭6……550/16/

長谷爲五郎氏 同氏編
世界一周圖繪 昭5……256/19/

金融研究會同編 講演集 第八編
明石照男 金融界最近の趨向 昭6……43/90/8

神戸市立生絲檢査 所同編
生絲檢査成績報告 昭5……755/2/5

宮內省圖書寮 同編
圖書寮漢籍善本書目
上 卷一 經部 卷二 史部 昭5……025/16/1
中 卷三 子部 昭5……025/16/2
下 卷四 集部 昭5……025/16/3
附錄 大藏經細目 昭5……025/16/4

京都市役所 同編
京都市勢一班 昭5……336/3/

同 同編 京都市第二十一回統計書 昭4……404/28/4

文部省專門學務局同編 學位錄
明治二十一年五月至昭和六年三月……587/5/

森川太郎氏 同氏譯
Fisher, I. 貨幣の幻覺 昭5……432/121/

大阪市社會部調査課 同編
都市と都市社會事業資料 昭6……532/7/

大阪市役所產業部調査課 同編
土耳古關稅定率表 昭6……497/2/

大阪商船株式會社 The Osaka Shosen
同編 Kaish a Track Chart, 1930……298/2/

岡波要氏大典記念出版協會 同編 御大禮記念寫眞帖
第一卷 大5……874/1/1
第二卷 大5……874/1/2
第三卷 大5……874/1/3
第四卷 大5……874/1/4
第五卷 大5……874/1/5

武田鼎一氏 同氏著
經濟學新論 昭5……411/447/

同 同 社會經濟新原理 昭6……411/448/

◇ ◇ ◇

COMMERCE.

Andree, F. – Geographie des Welthandels; ein Wirtschaftsgeographische Erdbeschreibung,

Bd. 3. Produktion, Verkehr und Handel; hrsg. v. B. Dietrich u. H. Leiter, 1930…… 457/ 14/ 3

LITERATURE.

Brunot, F. – Histoire de la Langue française des Origines a 1900,

Tome 1. De l'Epoque latine à la Renaissance, 1924…… 926/ 23/ 1

Tome. 2. Le seizième siècle, 1927 926/ 23/ 2

Tome. 3. La Formation de la Langue classique (1600 – 1660),

1e Partie. La Reforme de la Langue – Les Hommes – Les Institutions – Les Oeuvres, – Le Lexique, – Morphologie. 1930…… 926/ 23/3-1

2e Partie. Syntaxe, 1922……926/ 23/3-2

Tome. 4. La Langue classique (1660 – 1715), 2e Partie. Les Formes grammaticales. – Le XVIIIe siècle 1924 …926/ 23/4-2

Tome. 6. 1e Partie. Le mouvement des idées et lesvocabulaires techniques,

Fascicule 1. La Langue politique et économique. 1930…… 926/ 23/6-1-1

Fascicule 2. La Langue des Sciences. – La Langue de la Peinture. 1930…… 926/ 23/6-1-2

Tome. 7. La propagation du francais en France jusqu'à la fin de l'ancien régime, 1926 ……926/ 23/ 7

Tome. 9. La Révolution et l'Empire,

1e Partie. Le francais langue nationale. 1927…… 926/ 23/9-1

Graig, W. J. & Case, R. H. – The Works of Shakespeare,

Pooler: The Merchant of Venice, 1927…… 993/321/ 23

Schiller, F. – Schillers Werke; in sechs Haupt- und vier Ergänzungsbanden; hrsg. von P. Merker,

Bd. 1. Schillers Leben / Gedichte, 995/ 18/ 1

Bd. 2. Dramen: (1) Zur Einführung in Schillers Dramen; Die Räuber; Die Verschwörung des Fiesko zu Genua; Kabale und Liebe;……995/ 18/ 2

Bd. 3. Dramen: (2) Don Karlos, Infant von Spanien, Vorrede Schillers in der „Rheinischen Thalia"; Don Karlos; Maria Stuart;…… 995/ 18/ 3

Bd. 5. Dramen: (3) Die Braut von Messina; Wilhelm Tell; Demetrius; Die Huldignug der Künste; Erzählungen: …… 995/ 18/ 5

Bd. 6. Philosophische Schriften: … 995/ 18/ 6

Squire, J. G. – English Men of Letters (New Series),

Priestley: Thomas Love Peacock, 1927…… 993/324/ 9

年　鑑

國際文化協會編　國　際　年　鑑　昭5……051/6/

宗　教

大東出版社編　國　譯　一　切　經

經集部　四　昭6 ……782/1/

大集部　二　昭6 ……182/1/

歷　史

明治大正史刊行會編　明　治　大　正　史

第一卷　國　勢　篇　(一)　昭4……225/5/1
第二卷　同　(二)　昭4……225/5/2
第三卷　同　(三)　昭4……225/5/3
第四卷　同　(四)　昭4……225/5/4
第五卷　同　(五)　昭4……225/5/5
第六卷　產　業　篇　(一)　昭4……225/5/6
第七卷　同　(二)　昭4……225/5/7
第八卷　同　(三)　昭4……225/5/8
第九卷　同　(四)　昭4……225/5/9
第十卷　會　社　篇　(一)　昭4……225/5/10
第十一卷　同　(二)　昭5……225/5/11
第十二卷　同　(三)　昭5……225/5/12
第十三卷　人　物　篇　(一)　昭5……225/5/13
第十四卷　同　(二)　昭5……225/5/14
第十五卷　同　(三)　昭5……225/5/15

法律, 政治

穗積陳重著　祭祀及禮と法律　昭3……361/109/

牧野英一著　民法の基本問題

第　二　昭4 ……375/165/26

購入圖書

PHILOSOPHY.

Aristoteles.[3] – The Works of Aristotle; tr. into English under the Editorship of W. D. Ross & J. A. Smith,

Vol. 1. Ed. by W. D. Ross: Categoliae and De Interpretacion; by E. M. Edghill: Analytica Priora; by A. J. Jenkinson: Analytica Posteriora; by G. R. G. Mure: Topica and De Sophisticis Elenchis; by W. A. Pickard-Cambridge. 1928 ·····103/ 14/ 1

Vol. 2. Ed. by W. D. Ross: Physica; by R. P. Hardie & R. K. Gaye: De Caelo; by J. L. Stocks: De Generatione et Corruptione; by H. H. Joachim. 1930 ···103/ 14 2

Vol. 4. Ed. by W. D. Ross & W. D. Smith: Historia Animalium; by D. W. Thompson. 1910····· 103/ 14/ 4

Vol. 5. Ed. by J. A. Smith & W. D. Ross: De Partibus Animalium; by W. Ogle: De Motu and De Incessu Animalium; by A. S. L. Farquharson: De Generatione Animalium, by A. Platt. 1912····· 103/ 14/ 5

Vol. 6. Ed. by W. D. Ross: Opuscula; by T. Loveday, E. S. Forster, L. D. Hawdoll, H. H. Joachim. 1913····· 103/ 14/ 6

Vol. 7. Ed. by W. D. Ross: Problemata; by E. S. Forster. 1927 ····· 103/ 14/ 7

Vol. 8. Metaphysica; by W. D. Ross. 1928 ····· 103/ 14/ 8

Vol. 10. Ed. by W. D. Ross: Politica; by B. Jowett: Oeconomica; by E. S. Forster: Atheniensium Republica; by F. G. Kenyon. 1921 ····· 103/ 14/ 10

Vol. 11. Ed. by W. D. Ross. Rhetorica; by W. R. Roberts: De Rhetorica ad Alexandrum; by E. S. Forster: De Poetica; by I. Bywater. 1824 ·····103/ 14/ 11

Husserl, E. – Jahrbuch für Philosophie und Phänomenologische Forschung,

Ergänzungsband. Festschrift; Edmund Husserl zum 70. Geburtstag Gewidmet. 1929 ·····103/ 5 /10-2

Bd. 11. Über das Wesen der Idee. Von H. Spiegelberg.,
Vergegenwartigung und Bild. Von E. Fink.,
Die Einbildungskraft bei Kant. Von H. Mörchen.,
Zur Logik der Modalitäten. Von O. Becker.,
Nachwort zu meinen „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie." Von E. Husserl. 1930···103/ 5 / 11

Meinong, A. – A. Meinong's Gesammelte Abhandlungen,

Bd. 2. Abhandlungen zur Erkenntnistheorie und Gegenstandstheorie. 1929·····103/ 15/ 2

Windelband, W. – Geschichte der Abendländischen Philosophie im Altertum. Bearb. v. A. Goedeckemeyer. (Handbuch der Altertumswissenschaft) 1923·····122/ 8 /

LAW.

Lehmann, K – Lehrbuch des Handelsrecht, 3 völlig neubearbeitete Aufl. v. H. Hoeniger,

I. Halbbd. Lehre vom Handelsstand u. v. den Handelsgesellschaften. 1921·····384-6/ 46/ 1

Planiol, M. & Ripert, G. – Traité pratique de Droit civil français.

Tome 7 1931·····385-5/ 16/ 7

ECONOMICS & STATISTICS.

Maitland, F. W. – Select Pleas in Manorial and other Seignorial Courts. (The Publications of the Selden Society)

Vol. 1. Reigns of Henry III. and Edward I. 1889·····417/152/ 1

Mlynarsky, F. – Gold and Central Banks, 1929····· ·····433/108/

Woytensky, WL. – Zehn Jahre Neues Deutschland; ein gesamtüberblick in Zahlen. 1929 ·····408/ 2 /

校友會員名簿について

昭和七年度用校友會員名簿は來る十一月上旬發行の豫定でありますが會員名簿は基金として金參圓納入者に限り發行の都度配附することになつて居りますから、希望者は左欄申込書と共に基金を御拂込願ひます

昭和六年九月

關西大學校友會

申込書

No.……

一金參圓也　校友會名簿基金

右金額相添へ申込候也

昭和　年　月　日

氏名

關西大學校友會御中

一、勤務先

一、現住所

明治 大正 昭和　年　學部 專門部　科卒業

千里山俳壇　朝冷選

□　粉濱　中塚素木

十人會堂置吟行

雷が光らす杉の梢かな

來し方や一過の雨のはたゝ神

風鈴や浴みすみたる放心に

□　泰町　廣田誠男

栗の花山をうしろの草家かな

涼しさや海へながるゝ雲の影

涼しさや松の葉陰の鳩の箱

□　專文二　壹岐夕陽

軒々の菖蒲に風のわたりけり

汐の香に誘なはれたる涼み哉

□　專法二　宮崎忠義

睡蓮の水に白雲浮びけり

有馬行

九十九打高き木の香と草いきれ

新緑の埋めつくせし溫泉町哉

宮島行

夏の星夜半に著きし港哉

島青葉朝の霧に隱見す

若楓廻廊の丹塗錆びにけり

追加　朝冷

裏口や町に田殘る遠花火

裂け〳〵て芭蕉に嵐名殘かな

□當季雜詠募集

□封皮には必ず「千里山俳句」と朱記こと

□送稿先

大阪市東淀川區十三東ノ町三丁目

牡丹書房

有田朝冷

大正十一年六月十五日創刊
昭和六年九月十日印刷
昭和六年九月十五日發行

大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
關西大學學報局
編輯兼發行人　遠藤銀

大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷者　谷口春雄

大阪市北區堂島上三丁目十六番地
印刷所　谷口印刷所

大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報局

不許複製

大阪市東淀川區長柄中通
天六學舍　關西大學
電話堀川一一一〇三九
振替口座大阪一二六七五六八〇〇番

大阪市外千里山
千里山學舍　關西大學
電話吹田一二三

校友各位に

本學學報は維持費として年額壹圓御拂込の方に限り御送りして居りますから、校友その他關係者各位に於いて購讀希望の方は左欄申込書と共に維持費を御拂込願ひます

昭和六年九月　關西大學學報局

御拂込は郵便爲替か振替かを希望いたしますが若し三ヶ年分以上御拂込下さるならば御手數のかゝらぬやう集金郵便にいたします。

No. .....

學報申込書

一金　圓也　但學報維持費　ヶ年分（自昭和　年　月　至昭和　年　月）

右金額相添へ申込候也

昭和　年　月　日

氏名

明治 大正 昭和　年　學部 專門部　科卒業

一、勤務先

一、現住所

關西大學學報局御中

拂込方法　振替貯金又は郵便爲替　集金郵便（何れか一方を抹消して下さい　但し集金郵便は金參圓以上に限ります）

生徒補缺募集

特長　徵兵猶豫・幹部候補生・在營期間短縮・上級學校入學資格其他

晝夜共文部大臣甲種認定

此花商業學校

第一本科（晝間）四年以下
第二本科（夜間）三年以下　補缺若干名

大阪長柄（市電天七東北二丁）
電話堀川一九五一番

パラヌトリン

脚氣の豫防と治療に

米胚芽の有効成分 ヴィタミンB含有 最多量

大阪朝日新聞（昭和六年四月二日記載）

米の營養價論爭と題せる記事中に曰く「東京市衛生研究所の藤巻博士が「米の研究」の結果を發表したが、昨年十一月以降各種米の營養試驗を行つた結果、玄米に含むヴィタミンBを一〇〇とすると胚芽米三七・六%七分搗米二八・四%石搗砂米一九・八%で、もし胚芽米營養價を一〇〇とすれば、七分搗米は七五・四五%となつて居り、化學分析の結果から見ても動物試驗によるところも胚芽米が七分搗米に優つゐることが証明されたのである。つまり米に含むヴィタミンBの殆んど全部は胚芽の中にあり、同博士は更に鳩二百羽についてるることのないことをも証明され、島薗、佐伯兩博士の論爭の上に實驗報告は一つの鬼をつけるものである」と

パラヌトリンは米胚芽含有のヴィタミンB營養分を完全に抽出せる製劑なれば白米の常食によつて起るヴィタミンB缺乏並に脚氣の豫防と治療に極めて優秀なる効果を奏す。

包裝

液劑	一〇〇cc	一円
粉末	五〇瓦	一円二十錢
錠劑	五〇錠	一円
同	一〇〇錠	一円八十錢

粉末
錠劑
液劑
注射液 あり

詳細なる實驗報告書申込次第送呈

元賣發造製

塩野義商店 株式會社

大阪市東區道修町　東京市日本橋區本町

PA-10

關西大學學報　第九十二號（昭和六年九月十五日發行）

「うきよ堂」改名に際して

小店は過去五ヶ年皆樣方御生育の賜として其の牢乎たる地歩を「主として法律、經濟、社會其他文化科學に關する內外文献の組織的蒐集店」として確立して參りましたが今回店舗大改良を機に店名を「アジア書房」と改め新時代の古本屋としてひゐては皆樣方のより忠實なるアッシスタントたるべく努力精進を期したいと存じます。

何卒益々御引立下さいますやう御願ひ申上げます。

元うきよ堂改メ　アジア書房

倉橋一夫

大阪・櫻橋　電話北四六二〇番　振替大阪六〇七〇三番